
IS ～ 束が異常になったわけ～

観光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜束が異常になつたわけ〜

【Nコード】

N8622V

【作者名】

観光

【あらすじ】

篠ノ之束は人として壊れている。

彼女の欠点を知る人が聞けば驚くかもしれない。彼女が小さい時、周りに合わせるということを知っていたし、人を思いやることもできた。口調だつて周りと変わらなかった。それどころか、年相応に恋をする少女でしかなかった。

青年は宙へ行きたいと夢を語り、少女はそう語る青年が好きで、そんなどこにでもある何でもない風景。

それがすべての始まり。

これから語る物語は、ほんのー力

月の短いお話。

聞いても納得してくれないかもしれない。分からないかもしれない。それでも、それでも束がどうしてこうなってしまったのか。それを理解してほしい。

私は私がつ約束のために、ここで筆を持ち、親友の大切な思い出を語ろう。なによりそれが彼にとっての幸いになると信じて。

くくある人物の手記よりくく

* Arcadia様のほうでも掲載しております。

第一話（前書き）

始めに『 IS〜束が異常になったわけ 』では、題名の通り束が異常になってしまったわけ 元からあんな性格ではなかったと、私は信じて疑わない を作者なりに考えて、こうだったらしいなあというものを思いついたので書いてみました。

勿論異常になる前の束のことなので、

1、口調が普通。

2、そこまでぶっ飛んでない。

3、周りを思いやれる。

などのピースから束が構成されています。束は生まれたときから原作みたいな人間だったんだ！！ と思う方は今すぐバック。

そして最後には束が普通から異常になってしまうわけですから、バッド・エンドです。

基本はほのぼの。だけど最初と最後はシリアス。一応中編で、すでに最後まで書き終わっています。これから毎日投稿して皆さんの反応次第で、ちょこちょこ修正をして作品の完成度を上げていきたいと思っています。なので感想はなんでもOK。ダメなところでもいいところでもどっちでもいいので。どんどん感想のほうへご指摘をお願いします。

では、オリジナル要素その他に納得したうえで、

『 I S 〕 束が異常になったわけ 』 をお楽しみいただけたら幸いです。

第一話

くとある人物の手記よりく

私の親友に、篠ノ之束という人間がいる。

彼女が生み出したISはそのあまりの技術力と有用性ゆえに瞬く間に世界中に広まった画期的なマルチフォーマル・スーツである。それは搭乗者に絶対の安全性と、思考加速をもたらし、既存の乗り物を超える運動性能を保有している。

そのあまりにも他の技術を突き放した科学力をもつISであるが、それはもともと宇宙を目指し開拓する目的を持っていたはずだった。

しかしそれは世界中の人間には認められず、軍関係の方向へと力が入れられている。核兵器が禁止された今、ISの保有数が国の戦力を決めると行っても過言ではないほどに、ISはその有用性を世界に示している。

そんなISだが影響は軍のみにとどまらなかった。IS唯一の欠陥と言ってもいい点　男性が乗ることができない、つまり女性だけが世界を揺るがす兵器を運用できるという事実が、世界中の男尊女卑の風潮を一変させてしまったのだ。まるでこれまでの人類の歴史をひっくり返すかのように女尊男卑の風潮が世界をとってかわった。元々ゆっくりとだが、歩み寄りをしていたはずの風潮がすぐに移り

変わったのは、いったいどんな皮肉なのか。

さて、そんな世界を変えた、いや、世界を変える力を持つISを開発した本人はどうなのか。一体どんな人間なのか。それはほとんど知られていない。というよりも、誰も知ることができない。彼女が自分の情報を管理し、それを世界へ渡そうとしないのだ。

大衆が分かっていることは一つだけ。彼女が人並み外れた天才だということだけだ。

比べることがおこがましいほどの頭脳と類まれな美貌をもつ天才。聞くだけならば神様に愛されたような人間だ。しかし、彼女は重大な欠陥をもっていた。それは一部の国の上層部ならば当然のこととして知られている。

それは 大切な一部の人間しか認識できない。

人間が人間の輪の中で生きていくために絶対に欠かせない力をどこかへ無くしてしまった女 それが篠ノ之束だ。

だが……それは間違いだ。

私は知っている。篠ノ之束が大切な人以外認識できなくなったわけを。

私は見ていたのだ。篠ノ之束が壊れていった様を。

私は後悔しているのだ。篠ノ之束が壊れていく理由を作ってしまったことを。

だから私はいつまでも離れないのだ。篠ノ之束がどれだけ人として終わってしまっても。

篠ノ之束は人として壊れている。

それは天才だからではない。

天才だったからではない。

彼女の欠点を知る人が聞けば驚くかもしれない。

彼女が小さい時、彼女は確かに周りに合わせるということを知っていたし、人を思いやることもできる子供だった。口調だって周りと変わらなかった。

それどころか、年相応に恋をする少女でしかなかった。

だが……その恋がすべての始まりだった。

青年は宙へ行きたいと夢を語り、少女はそう語る青年が好きで、そんなどこにでもある何でもない風景。

それがすべての始まり。

これから語る物語は、ほんの一カ月の短いお話。

聞いても納得してくれないかもしれない。分からないかもしれない。それでも、それでも束がどうしてこうなってしまったのか。それを理解してほしい。

私は私がつ約束のために、ここで筆を持ち、親友の大切な思い出を語ろう。

なによりそれが彼にとっての幸いになると信じて。

第一話 「私は普通の女の子だよ？」

夏の暑い日のことだった。

夏休みを目前に控えた小学生たちはうるさいほどの音をならすセミにも負けない声を出しながら帰路へ着いていた。熱い熱いと文句ばかり言う大学生とは違い、この暑さの中でも小学生は元気に走り回って帰っていた。男の子は石けりをしながら、女の子は今時の女子高生予備軍の片鱗を見せつつ、楽しそうに下校していた。

そんな女の子たちのグループの一つに、ある少女がいた。

「ねえねえ束ちゃん！ この前でた夏休みの宿題つてもうやった？」
少し赤みがかった肩甲骨まで伸びた髪をかわいらしい水色のゴムで止めた少女　篠ノ之束にクラスメイトの少女が話しかけている。

「うん。やっぱり簡単だったよ。夏休みの宿題はあと……工作で貯金箱を作れば終わりなんだ！」

「ええ！ すっごーい！ やっぱり束ちゃんは真面目だね。夏休み始まる前に宿題が終わっちゃうんだもん。私なんか今まで取ってたチャレンジがたくさん溜まってるから、きつとお母さんにやりなさい！ って怒られてからやるんだろぅなあ……」

そこで束の隣を歩いていた少女　　織斑千冬が声をはさむ。

「なら、今からやればいいじゃないか」

少しだけつりあがった瞳。初対面ではきつめの印象を受ける。が、所詮は12歳の少女。そんな表情も大人からしたらかわいいだけだった。

「もう！　そう思ってもできないからやらないの！」

「まあまあ、ちーちゃんもそんなきついことをいうんじゃない、もっと励ますとかしてあげようよ」

「そうはいつでもものだな、束。もっと自分でしっかりしないとけないってーおばさん（束の母）もいっていたぞ」

「それでも！　もっとやさしく言うの！　せっかく夏休みになるんだからさあ、もっと楽しくいつちやあー！ー！！」

「おおー！ー！！！」

「……駄目だ、私はたまについていけないよ、束」

疲れたように息を吐く千冬。そんな彼女に束は後ろから抱きつく。

「ええい！　熱いわ！」

「もう、そんなことって。ほんとにこういうスキンシップが好きなんだよね」

「え、千冬ちゃんって実はさびしいと死んじゃうウサギなの？」

クラスメイトの子が、二人の様子に驚く。いつもは凜としている千冬が何だかんだでうれしそうに束と戯れていたからだ。

「違う！ あゝもう、束！」

「あいあいさゝ」

本気で暑苦しいと思い始めた千冬の内心を正確にサンプリングしていた束が敬礼をしながら千冬から離れた。

「はぁ……今日は剣道の練習があるから、私は先に行くぞ？」

「ええ、そんな！？ ちーちゃん今日はオールでカラオケに行こうって約束したよね！？」

「自分の歳を考えろ！ 私たちがオールなんてできるか！ そもそも約束だっしてない！」

「おーる？」

クラスメイトの少女はオールの意味が分からないのか首をかしげる。これが普通の小学生の反応だ。

「冗談だよ、がんばってね、ちーちゃん」

そうして話していると三人が分かれる場所まで来た。今日はここでお別れだ。束は二人に手を振ってバイバイと恥ずかしげもなく大き

く手を振って別れる。二人もそんな束に笑い返しつつ手を振った。

「……うん。一人になっちゃったなあ。今日はどうしよっか」

夕暮れの市街地に消えていく二人を消えるまで見ていた束がポツリとつぶやいた。

その表情はさっきまでとうって変わって冷たい氷のような表情だった。そこに笑顔はなく、落ち込んだ様子もなく、ただ人間の顔だけがあるようにすら見える。人間の顔を切り取って置いておいたらこんな表情になるのかもしれない。

本人に自覚はないが、その顔は見るものに不安を抱かせるようなものだった。

「うう、今日は箒ちゃんも剣道だっっていったもんなあ。やっぱりいっくんと一緒にいたいからかなあ。これなら私も他の誰かと約束しておけばよかったかも」

束は特に目的もない自分の予定を恨めしく思いながら、家路を歩く。今日は家に帰っても父と母はいないし、妹もない。さっきは千冬にスキンシップがうれしいといっただけだが、実は束の方が寂しがりやでスキンシップが好きな人間だった。こうして予定がぼつかりと空いて一人になるとどうしても、悪い方向に考えてしまうから、好きではなかった。……他の人のことを考えていることの方が好きな束であった。

「どうしよっかなあ」

独り言をつぶやきながら帰る小学生と言つのも少し不気味だが、特

に束は気にすることもなく歩いていった。

運動神経はあっても、体力もない束の歩く速度は遅く、他の小学生にもほとんど抜かれてしまいうらいに遅い。そんな彼女は明日のこ
とや、夏休みの予定のことを考えながら歩いている。考えすぎて石
に躓いたり階段で危ない目にもあったことのある束だが、今日もま
た歩いていると赤いポールに足を引っ掛けてしまった。

「うわっ！」

と同時に目の前から声が聞こえた。

「あ、ごめんなさい！」

瞬時に状況を判断して、自分が下を向いていたのが悪かったことに
気がつく、顔を上げながら謝っていた。

「え、いやいや、こつちも不注意だったし。別にそんなに謝らな
くてもいいよ？ そつちこそ大丈夫？」

「はい、ちよつと躓いただけなんで……」

当たり障りのないことを言いながら、視界を上げるとそこにいたの
はなんてことはない、ただの高校生だった。一応この辺では一番偏
差値の高い学校のバッチをつけて、真ん中に二と刻まれている。高
校二年生なのだろう。容姿は特に説明することもない普通。ニキビ
とかは無く、少し短めに切った髪の毛と額に浮かんでいる汗が特徴
と言える特徴か。束はその汗を見て、そういえば暑いなあ、と思う
程度であつた。

「あれ……もしかして君……束ちゃん？」

「え……あれ？　なんで私の名前知ってるんですか？」

だから突然目の前の彼に自分の名前を言われた時には驚いた。もしかして最近テレビでやっているストーカーという人なんだろうか。思わず身構える。

「えっと、この前の四区の地域会のボーリング大会覚えてない？　俺もその時いたんだけど……」

……四区のボーリング大会？

頭の中でその情報をもとにデータを検索すると、すぐに出てきた。あれは二カ月ほど前のことだった。地域の集まりでボーリングにいつて遊ぶ話が出て、その時束は千冬と一緒にいったのだった。千冬が256ピンというんでもないスコアを出したおかげでペアを組んでいた束もかなり目立っていたのだ。同じ地区だったというだけでこの青年が束を覚えていたくらいには。とはいえ、注目される側の束からしたら誰の顔も一緒だ。はつきりとした話し覚えてなかった。束は声をかけてきたナンパさんには悪いと思うが、正直に言う。

「ごめんなさい！　ちょっと覚えてないです……」

「いや、いいよ。逆に覚えてたらびっくりしてたし。でもこれで覚えてくれたよね。今度会ったら声かけてね？」

彼も高校生だ。しかし人の心の機微に注意して言葉を出す作業はできるのか、当たり障りのない挨拶で切り抜けようとした。彼の内心ではかわいい女の子だなあ、と思う一方で、周りから見たら俺口リ

コンに見えねえ？ と震えていたので、さつさとわかれたかったのが本音だ。

「分かりました。今度会ったら、私から声をかけますね」

束が言ったのも小学生にして会話を円滑に進ませる方法を知ってるなあ、くらいにしか思わず彼はそのまま束の帰る方向とは逆へ歩いて行った。

これが彼と束が出会い、縁を結んだ最初の日の出来事だった。特にドラマチックなことがあったわけでもなく、ただ道をすれ違いご近所のうわべだけの挨拶をしただけ。それだけの出会いだった。

束は天才だった。

誰が言うまでもなく、彼女は自分で自分が天才だと知っていた。いや、その言葉の範疇に当てはまっているのかすら怪しいほどの才能を自分が持っている、彼女は正確に理解していたのだ。

元々、彼女は幼稚園の時から賢かった。普通小学生高学年になるまで直感的な思考しかできず、論理的な思考しかできないはずだが、彼女は7歳の時から論理的思考を展開していた。周りの小学生たちの道筋の立っていない会話を聞いて不思議に思いながら、彼女の成長は続く。

他のクラスメイトの話があまりにも筋道だっていなくて苛立った時なんて数えきれないほどある。そんな中で千冬という他よりも成長が早くそれなりに束についていける存在に出会えたのは偶然か、あるいは奇跡か。

しかし彼女はクラスメイトとの面白くない苛立ちの募る会話から千冬と言う友達を得て解放されると同時に、もうひとつの事実に向面する。それは

計算だった。

束は今まで家にパソコンがあつて、それを当り前のように使っていた。もちろん以前親に使っているところを見られてからは、触っていると怒られるのであればないように使っていたが、その時にネットでいろいろな知識を溜めこんでいたのだが……そこで手に入れた数学的知識がどれだけ周りと比べて異常なのかを、小学校の算数の授業を聞いて理解したのだ。

自分がどれだけ周りと違うのか、6歳の春に彼女は理解した。

もし彼女が普通の天才であれば、ここで周りを驚かせてちやほやされて終わりだっただろう。しかし彼女は天才の中でも、異質過ぎた。スポンジが水を吸うなんてものじゃない。底なしのブラックホールに星が丸ごと飲みこまれるように、彼女は知識を手に入れていたのだ。そして彼女はそれを　　正しく理解して使えてしまった。

そう、彼女の悲劇はその知識　　それも数学に限らないものを使えてしまったことだろう。

彼女はネットの海にさらされた純粋な悪意の書き込みなどから人間の一面を知ってしまった。もちろん頭の中ではこれだけではないと知ってはいても、黒い一面を知ってしまったことは事実。彼女は自分の才能を、特異性を周囲にさらすことの危険性を知ってしまったのだ。才能があるということがもたらす周囲の変化。その卓越した頭脳であらゆる状況をシミュレーションし、彼女は才能を隠すべきと判断したのだ。なにせ彼女は当時から周りが思いもしないような発明品の図案を頭の中に溜めこんでいたのだから。彼女が隠そうと思うのも当然といえば当然だった。

とはいえ、そんな考えに彼女がいたってしまったのにはちょうどその時才能ある人間が隣の国に拉致されてしまうという事件が背後にあった。そのおかげで関係するそういった類の情報があふれていたということも理由の一つとしてあげられる。

そうして束は自分の力を隠すことにした。

それがどれだけ恐ろしいことか理解できるだろうか。

六年生の十二歳にすぎない少女が自分ができることを誰にも自慢せず、それこそ親にも言わずに自分だけで秘密を守り続けようと決心

するということの恐ろしさを。

彼女は自分の力を知っているからこそ、今なお隠しているのだ。とはいえ……最近はずりとの会話も楽しくなってきたし、それなりに自分の感情の動かし方もわかってきていた。このままいけば、きっと彼女が学校で抱える悩みは一つだけになるはずだった。しかし……そのひとつが厄介だった。

最後の一つ……それは自分の才能を見せつけてやりたいと思う自尊心だった。

彼女は時々強く思ってしまう。みんなに褒めてほしい。自分がやったことをすごいと言ってほしいと。確かに彼女は学校で一番の成績をとってるから、褒めてもらう機会には事欠かない。しかしそれは彼女の全力じゃない。それこそ六年前には覚え終わったことで、半分寝ててもできるような問題をやって褒められても、むしろ束としては苛立ちが募るだけだった。

……本当に全力でやったことを誰かに見てほしい。

束がいつしかそう考えるのは遅いことではなかった。だが……彼女はそれを鉄の精神で抑えきった。そこには家族への確かな愛情があったのだ。周りからの評価が一気に変わると、そのとき大抵は家族も巻き込まれる。そうして家族に日々が入るくらいなら、と思い束は隠す方を選んだ。

彼女は天才であつて、同時に周りの人間を思いやることもできる

ごく普通の少女だったのだ。

「うゝゝゝんっ」

そんな束は今、自室で読んでいた本をパタリと閉じるとそのまま大きく伸びをした。ずっと本を読んでいたので体が固まってしまったようだ。

図書館からわざわざ借りてきた有名な経済小説に久しぶりに満足しながら、束は席をたつとランドセルからノートを取り出して、ペー지를何枚か切り取る。几帳面に何度も山折りと谷降りを繰り返し綺麗に切り取ると、ペラペラの白紙のノートにいくつかの絵をかきこんでいく。束は実は意外と手先が器用なので書いてある絵はうまい。どうやら何かの図面の用だ。

「ゝゝ」

束は鼻歌交じりにそれを書きあげていく。よくよく見れば図面の上に書いてある題名が、夏休みの貯金箱となつている。彼女は貯金箱を作るために絵を描いているらしい。しかしその図面の中に明らかに場違いなモーターや、配線図が書いてあるのは少しだけない。一体何を作るつもりなのか。

「やったね！ できたー！ー！」

迷うことなく図面を引き終わると、工学生もびっくりな図面が書かれていた。どうやらお金を入れるとウサギ型の貯金箱が少しピヨンピヨンと走りだし値段を読み上げる仕組みのようだ。

「でも……これはまずいんだよね……やっぱり違つのにしょ」

しかし、それは間違いなく小学生が作れるものではない。一体どこに入れたグラムから値段を読み取り、設定した機械に喋らせる小学生がいるというのか。この程度の技術であれば少し騒がれるくらいだが、慎重な性格の束は自ら自重することにした。

「やっぱり私一人だと作っちゃうなあ……今度ちーちゃんと一緒に作ろつと」

やはり自分は一人でいるべきではない。

束はそう思った。

今だってなんで自分がこうして我慢しなくちゃいけないのか、自分で自分だけがこんな風になっているのか、そのことでイライラしてくる。自分で決めた方向性とはいえ、それでもこの状況に鬱屈とした気分にする。束は自分の感情すら制御するが、それでもやはりその心は12年しか生きていない小娘だ。今までのたまりにたまったストレスをどうにかしようとし、処理できるほどの力は未だになかった。

もしこのまま束が一人でいたら……きっと彼女は誘惑に負けて常識を覆すようなとんでもないものを作り出してしまつたろう。

今現在彼女の頭の中にはそう言つた類のものがいくつもある。今までは効率がケタ違いの発電機や、理論すら思いつかれていない空間制御装置。それらを束は戯れに作るだろう。そうなればその先を容易く予測できる。そしてわかっていても一人の時間が多くなつた束は作ってしまう。現に今も束は小学生の領分を越えたモノを

作り出そうとしてしまった。このままではまずい。

「ほんと、ひとりってやだなあ……」

自分からの誘惑に負けそうになる心を叱咤し、そつと束は息を吐いた。そこには疲れたような色が、少しだけ混じっていた。

束にはそう思えた。

彼女は自分の心の中に、常に一匹の化け物を飼っている。

それは束自信の心の姿なのか、それとも彼女が捕まえてしまった闇なのか、はたまた化け物自身が束を探してきたのか。それは誰にもわからないし、束自信も自分が負けなければいいと、そう思っている。

た。

しかし、たった一人でこの化け物　オオカミと一緒にいれば、狡猾なこのオオカミに騙されていつか束は籠の鍵をあけるだろう。そうなった時、ただのウサギでしかない束は一体どうなるのか。それは後の歴史が知ってる。

く抜粋、とある人物の手記よりく

第二話

どうして私なんだろ。

そう考えることがなかったわけじゃないよ。

友達は頭のいい方がいいっていつも言うけれど、私はそうは思えなかった。

だって、もし頭のいい方がいいなら、私は悩まずに済んだもの。

くくある科学者へのインタビューより抜粋。

やっぱり蒸し暑い夏の日のことだった。

やけに強い日差しが燦々と差し込み、道路から伝わる熱気がうざったいほどに暑くて、遠くの景色がかすむような夏の日。東は友達と約束したプールへと足を進めていた。

プール日和といえばそうなのかもしれないが、それはあくまでプールに入っている間。そこに行くまでが地獄のようだ。

「プール、プール、プール！」

「はやくスライダーにのりたーい！」

が、そんなことは子供たちの目先の楽しみの前には特に意味もないようだ。彼らは皆一様に楽しそうな顔をしながら水着の入ったプールバックを揺らしている。

「早く東ちゃんもいこー？」

「うん！ 早くいかないと場所取られちゃうもんねっ」

ひととき元気のある小麦色の肌をしたクラスメイトが東の手を引く。それに束はうれしそうに顔をほころばせながら、ぴょんと飛び跳ねてクラスメイトの後ろを追った。

「うんうん、今日は楽しくなりそうだねっ」

「そうだよね、千冬ちゃんも来ればよかったのに。もったいないよね」

「でも仕方ないよ。稽古って言ってたもん。ね、東ちゃん？」

「うん。でもちーちゃんも稽古するのが楽しくてやってるんだから……それに今度遊ぶ約束もしたし、今日は私たちも……あゝそゝぶゝぞー……!!」

この前の一人の時間とはまるつきり違って、今日はみんながいるし、プールで遊べる。東はいつもよりもずっと機嫌が良かった。本当なら親友の千冬も一緒に連れて行きたかったけれど、しばらくは剣道の稽古があつていそがしいらしい。泣く泣く諦めて　もちろん妥協案として一日束に付き合う約束をさせた　今日はクラスメイトの仲のいい友達と来たのだ。

クラスと一緒に付き合いもそれなりにある友達ならきつと楽しめる。お母さんからもらった二千円がはいったウサギの刺繍のある財布を握りしめたまま空に突き上げて、声を張り上げる。

「えいえい、おー……!!」

やはり束の友達だからか、テンションとノリがいい。残りの二人も手を一緒に突き上げた。それをニヤニヤしながらみて、束は再びプールへと駆けだすのだった。

第二話

「早く早く！」

「もう、待つてつてば！」

市民プールは嫌だと言った二人の意見を採用してちょっと遠くにある大きめのプールに来て、すぐさま着替えた三人は日陰を取れる位置にレジャーシートを引いていた。

なかなか知恵の回る束は準備をしてから泳ごうと言ったのだが、お子ちゃまなクラスメイトたちはまず泳いであらうと急かす。しかし拠点の重要性を知っている束は断固拒否。まずは日陰をとるべきだと独裁者張りの演説をクラスメイトにかまして、どうにか準備をさせていた。

「できたー！ もういいよね、束ちゃん！？」

もう待ちきれないとばかりに束に詰め寄るクラスメイトその一。少し頬を引きつらせながら、

「う、うん」

とうなづくのが精いっぱい束だった。……内心では私、母親のポジションにいる……？ と首をかしげていたが、どうでもいいことだと思ったのか、そのまま二人についてプールへと走っていった。

「どこから行く？」

「やっぱりここは束ちゃんに決めてもらおうよ！」

「ええ！ そうだな、流れるプールは後でも行けるし……うん！
ここはやっぱり朝のうちにスライダーに行こっか！」

このプールは県内でも大きい方で、スライダーに始まり流れるプールなどの基本を抑え、さらには飛び込み台と波のプールもある本格プール施設だ。なかでも全長320mのスライダーは全国でもあまりない特大のものとして有名で、ジャングルのように入り組んだスライダーのチューブは時おり透明になっていた高所を滑るスリルがあつて評判がいい。まだ滑ったことじゃないが、束は楽しみにしていた。

「「さんせー！」」

キャピキャピとこの後どうするとか、スライダーを滑ったことがあるとか、そんな話をしながら束たちはスライダーを滑るために階段を上っていく。

まだ朝早い方だから、並んでいる人は少ない方だ。以前束が家族で来た時には一番下の階段の入口まで人がいたのだから、大体ピークの1/20程度だろう。そこまで集客できるこのスライダーは

そんなに面白いのだろうか。年相応に楽しみになる。

「でも昨日の人ってかっこいいけどびみょーな話しかなかったよねえ」

「あ、わかる。歌がけっこう好みだから期待してたのに、なんかコメント下手だしおもしろくなかったよねえ、束はどう思う？」

「うん。あの人は微妙だけど、隣の人はかっこいいなあって思ってる」

束は二人と昨日のテレビに出てきたかっこいいタレントのトーク力のなさについて話しながら自分の番を待つ。やはり友達と話をしていると時間がたつのも早い。さっきまで前にいた男性がいつの間にか目の前にいなくなっていた。おそらくもう滑ったのだろう、そうして体感時間としては短い時間で束の番が来た。二人は滑ったことがあるらしく、束に一番を譲ってくれるそうだ。すこし感謝しつつ、チューブのなかに身を躍らせる。

始めは青いチューブ。淡い光が漏れるチューブの中を独特の爽快感と共に風を切りつつ進む。それなりに気にいっていた雰囲気だったのだが、すぐにパツと視界が開けると蟻地獄のようなお椀の形の場所に出る。そのままのスピードで突っ込むと、蟻地獄の壁をぐるぐると回りどんどん速度が落ちて一番下まで降りていく。そして次の色のチューブへ運ばれる。初っ端からなかなかこった仕掛けだ。束は蟻地獄のアイディアは面白いなど、頭の中にメモしつつ、次のはどんなものが出てくるか余計に期待した。

次のチューブはさっきとは変わって紅いチューブだった。太陽の光で微妙に透けて見える世界は不思議とチューブにいる閉塞感を与え

た。同時になぜか……不安になる。滑り落ちていくこのチューブがどこか変な場所につながっていたら？　どこかで落ちたりしないよね？　ちゃんと下まで降りられるよね？

いやな気分が束に迫る。

そんなことありえないはずなのに、嫌な想像がかきたてられて、肌がざわざわとする。

早く、早く下まで降りたい。

束がそう思った時、赤しかなかったチューブのなかに肌色が見えた。

……なに？

そう思ったのも一瞬。束はすでに100m以上滑ってきていてそれなりに速度が出ている。その場所から動いてなさそうな、その物が視界に映ったと思った次の瞬間には、それにぶつかっていた。

「きゃあ！？」

「うおお！？　なんだあ！？」

訂正、物ではなく者だった。

「イッタ~~~~イ！！……もう！　なんでこんなところで止まってるんですか！！」

束はぶつかったショックで体に痛みが走るのを自覚しながら、チューブのなかで止まるという馬鹿なことをしていた人間を睨む。もし

スピードが特に出ているところだったら怪我をしていたかもしれないのだ、束が怒るのも無理はない。

「それと……早く離れてください！」

そしてぶつかったショックで束とアホの体がくっついたまま滑っていた。束は一応上側だが、それでも見ず知らずの人と体をくっつけていい気はしない。すぐに力を入れてアホから離れた。そしてようやくお互いに離れていくとお互いに顔を見る。

「……あれ、ボーリングの人？」

「……え、束ちゃん？」

どんな奴がこんなあほなことをしたのかと、呆れつつ睨んでひどい目に合わせようとも思っていたのに、相手は知り合いだった。思わずその平凡な顔をまじまじと見る。彼もぶつかってきたのが束と知って思考が停止する。本当なら彼の次に降りてくるのは友達であつて、一緒に滑ろうと友達が言ったからこそスライダーの途中で待つ暴拳に出たのだから。まさか他の人が、それも近所の人が滑つてくるとは思うまい。……とはいえ、チューブの中にいるのだから、固まっていた二人がそこから滑り出したのは必然だったのだろう。偶然にも彼の上に乗るかかっていて離れようとしたとき、束は彼をまたぐようにして下側に降りていた。そのため必然的に束は背中から滑っていく形となり……

「あわわ~~~~！」

まったく先が予測できないままスライダーを滑ることになる。

「ひゃあああー！？」

こういった類の遊びは先が予測できてある程度身構えられることが前提で楽しめるのであって、それができないときはめちゃくちゃ怖いだけだ。事実束は右に左にと振られることに翻弄されて涙目になっている。……一応束の運動神経は人よりもずつといい。後に全国優勝をするようなスペックの持ち主を妹に持つ束も、自分からはあまりしないけれど、運動は人以上にできるのだ。が、それでもこうして軽くパニックになっていればどうしようもない。スライダーの特徴の一つである水が多めに流れている点のせい、体をひっくり返して前を向こうとするもうまくできない。まるで背泳ぎをするような体勢で悲鳴を上げながらどんどん加速して滑っていく。勿論周りは、おお楽しそうだな、としか思ってくれないわけだが。

「ええ、束ちゃん！？」

そこで束をそんな体勢にしまった男が動き出す。なんだか束の悲鳴が本気っぽいので彼はちよつと顔を青くしながら束を追う。

まあ、実際は束が怖がっているだけで、特に怪我をすることもないのであとで笑い話になるだけだろう。しかし、激突後、後ろ向きで滑りながら本気の悲鳴を上げさせている彼からすれば、束がなにか怪我をしたんじゃないかと不安になるわけだ。彼は束に追いつくために手で加速をつけてどんどん束に追いつがる。

（ええ！？ やだなんでこつちくるの！？）

しかし、束の視点から見ると、後ろ向きで怖いのに、さらにはぶつかった男が必死の形相で加速しながら追いかけてくるようにしか見えない。どんなホラーだ。間違っても助けてくれる王子様には

見えない。

「ちょっと待ってな。今そっち行くから！」

（むしろこないで！）

束は叫ぼうとするも、かすれて声が出ない。わたわたと手をふって来ないでアピールをするけれど、彼には余計に助けてと見えたようだ。恐るべし勘違い。

その勘違いにも気がつかないまま彼は何度もチューブを叩くように加速し、束の足を掴むとそのまま引き寄せて正しく前を向かせる。聞こえはいいが、横から見れば小学生を胸元に抱えて滑っている変態さんだった。……兄妹には、見えなくもないかもしれない。

「きゃあああああー！」

そうこうしているうちに、十分な加速の付いていた二人はチューブをものすごい勢いで滑り落ちてゴールのプールへと落ちていった。その体制は座った体勢なので落ちるときにプールの抵抗をもろに受けて顔からいった。

「ぷはあっ」

ざばーんつとよくある音をならしながらプールに落ちると、それを見ていた彼の友達が駆け寄っていく。彼がグループの最後の二人のうちの一人で、ちゃんと待っていてくれたらしい。彼が笑わせてくれる最後だったので、みんな口々にかかってやろうとプールの中へとざぶざぶと入って

固まる。

「あ？ みんなどうしたよ」

そういった彼の手元には一人の美少女。上で別れた時にはいなかったはず。……すでにこの時点で詰みだった。

彼の友達は何々に「ロリコン……」「えっ……」「短い付き合いだったな」といつつ彼の元から去っていく。

「え？ あっ！ ちょっと待ってくれ！ ご、誤解だ！」

途中で気がついた彼が必死で誤解を解こうとするも、「犯罪者はみんなそういうんだよ」と言われれば返す言葉もない。というより何をいつてもまとともに相手が彼の言葉を聞いてくれる気がしなかった。

思わず呆然と束の手を握ったまま、立ち尽くす。それが束の友達の下りてきてそのまま彼にぶつかるとまで続いたのは、明日以降の学校での評判とかもろもろを予想したうえでのショックとかがあったのだろう。束が見上げたとき、逆光で顔はよく見えなかったが、滴る雫がきらりと光りを反射している……そんな気がした束であった。

「はあ~~~~」

ベンチに座りつつ周りに雰囲気喧嘩を売るような溜息を零した彼。束はそんな彼の姿に、自業自得があるとはいえほんの少しだけ同情してしまった。途中で止まるのはいけないと思うが、まさかそんなちょっとしたミスで彼の今後の学校生活の方向が変わるとは、さすがの束も予測できなかった。

詳しく聞けばあの時チューブで待っているという考えを最初に出したのは彼の後ろを滑る人間だったそうだ。まあ、本当であるならそんなことを持ちかけられても断ってほしいところだが、友達に約束を反故にされたところをみると、少し同情的な気分になってしまふ。束の心はそんなに凶太くないので、そういった人を見るとそれなりに何かしたくなる。例えば電車で人に椅子を譲るとか、その程度のことだが。

「あの、大丈夫ですか？」

この場合完全に束が被害者側で声をかける必要もないのだが、この

時の束は実に常識的だ。相手のことまで心配できるくらいには。

「大丈夫大丈夫」

からからと乾いた笑みをする彼にすこし頬を引きつらせる束。内心では、この人大丈夫かな、と思っていた。

……今の状況って、いいのかなあ？

束は考える。

今彼は自分の明日以降のロリコンと言われるであろう日々を考えてダウナーな気分になっていようだが、むしろその後もこうして一緒にいる方がまずいんじゃないかな、と。もう少し経てば缶ジュースを買いに行った束の友達も戻ってくる。そうなれば小学六年生に囲まれる高校生のできあがり。完全なロリコンじゃないかと。……束はロリコンの意味を実に正しく把握していた。

「でもおんなじ日にここに来てたなんて奇遇ですね」

「本当だよな。俺も束ちゃんと会うとは思っても見なかったよ」

「私もです。でも、いいんですか？ 友達とわかれちゃって」

「いって。どうせ少し経てばあいつらもまた戻ってくるだろ。別に喧嘩したわけでもないしね」

そういうものなのかと、束はどこか憮然としつつ納得した。女の子の関係を保つ方法とはまた違った漫画みたいな男の関係があるのだから、と頭のなかにメモを残しつつ、さっきのお詫びに買っても

らった缶ジュースを飲む。体重を気にする女子高生たちが好む水の喉を通る冷たさに、内心一気に飲んでしまいたい気持ちになりながら、束は口惜しそうにペットボトルから口を離した。

「お、いい飲みっぷりだね」

彼はそんな束の姿にちやちを入れる。しかし女の子にいい飲みっぷりと褒めるのはどうだろうか。このあたりに彼のデリカシーってやつが無さが透けてみえる。

最近になって大きくなってきた胸に手を当てて溜息を吐くと、彼の姿をそつと観察した。

170ちよつとの身長と、それなりに鍛えてあるのか引き締まった体。少し短めの髪の毛をかきあげているようで髪が立っている。何処となく野獣のような印象をつけそうな髪型だが彼の優しげな瞳がその印象を外してしまう。はつきりと言ってしまつと、そのあたりの高校を探せば一人か二人は見つかるような青年だ。具体的には誰かが中学校のアルバムを持ってくれば、あれ、こいつお前に似てない？ という会話ができるくらいだ。

束はそんな彼の姿に、特に何かを考えるまでもなく、そつと目を伏せた。ちよつとだけ彼の腹筋が割れているところに目が移ってしまった。意外と男らしい体つきをしている。

「えっと、あの、この後はどうするんですか？」

自分の子供らしくない視線をごまかそうと声を上げた。そんな束に気がついたように彼がすまなそうに頬を掻く。

「そうだね、とりあえずはやっぱりみんなを探しに行こうかな」

束の言葉からどこかへ早く行ってほしいとでも読んだらしい彼は、束から離れるもつともらしい理由を言った。束はそれに気がついたようで、彼を急かしたことを申し訳なさそうに俯いた。そんな束に彼は楽しそうに笑いかける。

「まあまあ、縁があつたらまた会おうね、束ちゃん」

彼は束の頭に一瞬手を置いて撫でようとしたが、どうにか置く前に手を止めると後ろに隠して束にバイバイと手を振った。

「はい。いつかまた縁がありましたら」

束もそういうと彼はその後一度も振り返らずに流れるプールの方へと歩いていく。そうして彼の姿が人ごみの中に消えていくのを見届けた束は大きく息を吐いた。やっぱり年上と一緒にいるのは疲れるようだ。束は買い物にいった二人が早く帰ってこないかなあ、とわざわざ取った日陰の中で思うのであった。

「また今度ね、束ちゃん！」

「また行こうね！」

夕暮れ時、夏の長い日もそろそろ沈もうかという時、ある交差点で
ありふれた会話が聞こえる。女の子たちの元気な声に家に帰ろうと
しているサラリーマンたちは少しだけ笑顔になり、町をほんの少し
だけ明るくしていた。

「いいよお、で・も・宿題が終わらなくて行けないのはヤダから
ね！？」

そんな未来になんの恐怖もない三人の女の子たちの内の一人である
束が意地悪そうな顔をして二人に言った。

「あはは。そのときは束大先生にお手伝いを頼んじゃうかも」

「うんうん。オタスケマーイン、こっち来てー！ーってお願いし
ちゃうかも？」

二人は束の冗談を笑ってかわす　先送りにするともいう　と、軽い冗談を交えつつ、後で束に泣きつけるように口約束を結ばせようとする。……きっと最終日が近くなると今日のことを話にあげて手伝わせようとしているのだろう。

「だーめ。束さんはそんなに暇じゃないのだ！」

二人のしわくを完全に把握している束は腰に手を当ててふんぞり返って断った。内心残念に思いつつ、その大げさなポーズにクスクスとクラスメイトが笑うと、束にも伝染したように笑いが移る。そうしてひとしきり笑うと、彼らは時間が押してきているのか、その場所でバイバイと手を振って別れた。あまり門限に厳しくない束の家と違って、彼らの家はかなり厳しいらしい。それを破るとしばらくの間でかけさせてくれないのだそうだ。夏休みにその罰は痛い。束は人の家には大変なことがあるんだあと人ごとのようにつぶやいた。

束は家に帰るためにゆっくりとだが歩き始める。以前のようにゆっくりとした歩み。しかしどこかふらふらとしている。束は少し張り切り過ぎたと思いつつ、ぎこちない足を動かして家に帰ろうとする。運動は嫌いではないし、苦手ではなくとも、あんまりしない束の体力は多くない。家に帰らなくては休めないと頭ではわかっていても座りたくなる。

そんな束の歩く先に都合よく公園のベンチが見えてしまった。

木でできた普通のベンチだ。雨風にさらされ小汚く見えはするものの、疲れた束には輝いて見える。家に帰った方がいいと思いつつも足はふらふらとベンチを目指し、結局トスンと音を立てて座ってしまっているのであった。

「ふう〜」

と老人のような声と共に束が背もたれに体を任せる。心の隅でマッサージチェアのようにもんでくれないかなと思うが、それは望みすぎだ。束は頭の隅に公園をマッサージチェアにする方法を三つ四つと考えつつ、今日は楽しかったと頬をほころばせる。

「……ちーちゃんがいればなあ。」

もつと楽しかったのに。

続く言葉を飲み込み吐き出さないようにしながら、束はそつと空を見上げた。夕暮れの紅い空の中に、かすかに星の光が見えた。いや、もしかしたら人工衛星かもしれない。

束は人口と天然の区別はつきにくいなんて、いいなとつぶやいた。

彼女は天才だ。それもはじめから人を超絶したレベルでの天才。それは人工的にできるものではなく、いわば天然の才能。星の光は天然と人工の区別はつきにくいのに、束の自然的才能は自ら隠すことを忘れればすぐさま見つかってしまう。それは強すぎる光を放つからだ。だからこそ星の海のような場所に束も行きたいと、そう思ってしまったのだろうか。

人工物の放つ光は細く小さく、そして狭い。それは凡人としての人生のけわしさを表すかのようだ。だが天然の光はさまざまな色合いと、人を見入らせるような魅力、そして強い光を持っている。束の才能もまた同じだった。

夕日が沈みきる刹那の間。彼女は空を見上げ続ける。そんな彼女の表情は無表情に見えて、そして儚く、歳不相応に大人びて見えた。

本当に一瞬、彼女は年不相応な精神を隠さなかった。

だからだろうか。

「じゅんわ」

空を見上げる彼女に声がかけられたのは。

「君も星が……好きなのかい？」

ひと夏の短い物語が

幕を開ける。

第二話（後書き）

感想、誤字等がありましたら感想のほうへお願いします。

第三話

〱ある人物たちの暑い夜の密会より〱

俺はよく知らないんだ。

まあ、一応話には聞いたことはあるよ。

なんでも姉ちゃんはずっごい借りがあるんだってさ。

どんなものか？ いや、俺が聞いても教えてくれないんだ。

ただ、一生かけてでも返さなきゃいけないくらい大きなやつなんだってさ。

それと……………東さんに関係あることらしい。

だから詳しくは俺も知らないんだってっ！

でもみんなも疑問に思ったことくらいあるだろ？ あの東博士とどうして姉ちゃんがずっと友達でいるのかって。

前にある雑誌でみたんだけど、東さんとはあんまり友達になりたくないって大抵の人が言うんだって。それでも交友が続いている姉ちゃんはさすが最強の搭乗者とか。

だからさ……………考えたことくらいあるんだ。

束さんは どうかおかしい……って。

ほんとはそんなこと考えたらいけないんだと思う。でも俺もそう思ったことがあるんだ。

それに……なんで姉ちゃんは束さんが大変なことになってもずっと友達でいるのか不思議なんだ。

だってそうだろ。普通ならISに乗って日本に落ちてくるミサイルを破壊しようなんて考えにつき合わないだろ？

姉ちゃんは教えてくれなかったけど、その借りが、理由なんだと思う。

根拠？ ……別にないけど。なんとなく……かな。

あの人はもう覚えてもいないけどさ、やっぱり姉ちゃんは律義なんだよな。

うん、俺もそんな姉ちゃんが好きだ。

でもさ……いつも、その話をするときはさ すっげえ悲しそうな顔をするんだ。

なんで、だろうな。

第三話

「…………お兄さん？」

「そ、さっきぶりだね。束ちゃん」

消えてしまいそうなくらいの儚さをみせていた束に声をかけたのは今日、スライダーのなかで出会った彼であつた。彼は束に話しかけ

るとそのまま近くの遊具に腰を下ろした。

「で、束ちゃんも星が好きなの？」

そんな彼が繰り返すようにいった。束はその質問に少しだけ気おくれするように息をのんだが、すぐに唇をペロリと舐めると彼の目をのぞき見た。

「眺めてるのは、好きかな。やっぱり星って綺麗だし」

束は彼と視線を合わせて睨むように眉を寄せた。しかしそんな彼女の反応のどこかしらがおかしかったのだろう。彼は微笑むと夕暮れの赤みが消えた真っ暗な空に視線を向ける。

「だよね。俺もそう思う」

彼がそつと小さな声でいった。しっとりとした夏の空気に似て、耳の奥にじめじめと残りそうな声だった。束は前と違う声色に引っかかりを覚えながら、さっきまで見せていた不安定な表情を、そつと隠した。

「どうしてここに？」

束が話を変えようと口を開く。なんとなくだが、彼が前と違うことが怖かった。

「束ちゃんはわすれちゃったかな。今日は俺も同じプールにいったんだよ？ 一応俺の家って束ちゃん家と近いからね、それなら帰り道も同じようなことになるでしょ？」

誰もいない公園の中で風に揺れているブランコがキィキィと音を小さく鳴らしている。静かな公園で彼が空をみたまま言った。束はそれもそうだと、納得しつつ、それでも不思議だった。

「でも、どうして私に声をかけたんですか？　ここを見られるとクラスの人にまたロリコンって言われちゃいますよ？」

束は彼があの後、クラスメイトの友達と合流して遊んでいたのを見ていた。何だかんだできつとあの後もロリコンって言われていたのを知っていた。

「別に、この時間にここにくる奴がクラスメイトなんてことはまずないから大丈夫だろ」

「そうですか？　たまにクラスメイトには会いますよ？」

「……あゝ、あれだ。高校は小学校と違って結構遠いところから通ってくる人が多いからな、そんなに外では会うことないんだよ。だから心配する必要はなし！」

「心配？　……したつもりはないんですけど」

「ふふふ。隠さなくてもいいとも。お兄さんは知っている。束ちゃんが俺の社会的身分の変化を心配してくれているというのはよくわかってるさ！」

彼は大仰に手を挙げて空へと叫んだ。ちょっと危なそうな人に見えた。

「もう、それでいいです」

束は彼の性格がめんどくさそうなことを早々に悟ると、さっさと帰ろうと腰を上げた。が、その腰はすぐに落とすことになる。

「で、悩める天才少女はなんで星を見上げていたんだい？」

ビクツと傍目にもわかるくらいに彼女の肩が跳ねた。束は腰を持ち上げることもなく、ゆっくりと振り返った。

「私が悩んでる？」

束は彼の言葉の中に『天才』という言葉があつたことに心が震えるのを自覚した。同時にどうしてそんなことを言い出したのかが気になつて仕方なかった。束は自分の才能を周りに知られるわけにはいかないと思つていたから。

……もし知られていたら。

そんなわけはない、とわかつていても血の気が引いていった。こんな一人の人間程度に認知された程度ではどうにかなるとは思えなかったが、それでも警戒する必要がある。彼が束の才能に気が付いているのかいないのか。……冷静で緻密な思考は冗談の一つとして言つたと主張しているが、なんとなく彼女の本能と言うべき精神の深いところが、彼への警戒を怠るなと主張していた。自分が動揺していることを悟られたなくて、言葉の羅列の中から取り抜いてもさして影響のない部分を抜き取る。

「たぶんね。俺にはそう見えたよ」

彼は律義に答えてくれたが、束は安堵の息を吐いた。どうやらあの

言葉は彼が束の天才性に気がついて言ったのではなくて、やはり冗談の類だったと推測できたからだ。ひとり心のなかでよかった息を吐いた。

……まあ、誰かにバレるようなへまはしてないしね。

落ち着いてくると周りを見る余裕もでてきた。自分があの言葉に強い忌避感と言うべきものがあるらしい。

「別にただ眺めてただけです」

一瞬どうしようかと思っていたが、彼の言葉が冗談ででた言葉出ない以上、ここにいる必要もない。束は今度こそ家に帰ろうと腰を上げた。

「そう？ 俺にはうらやましそうに見ていたように見えたけど」

もう一度束の肩が震えた。

「なんていうかき、星の光に吸い込まれるような顔……してたよ。なんか悩みでもあるんじゃない？」

その言葉が耳へと入り、鼓膜を震わせると同時に目の前が灼熱の劫火で彩られたように真っ赤に染まった。

……知ったような口を……ッ！

おそらく心配して声をかけてくれた彼に危うく激情のあまり、思いつく限りの罵詈雑言を吐き出しかけた。束は必死にそれを自制しつつ、表面上は何でもないような顔を取り繕う。

「……そうですか？ 別に何にもないですけどね」

「ふん」

何もかも見透かしたような顔で束を見る視線に、束は本気で帰ってしまうのもいい案なのではないかと思う。なんだか彼は面倒な類の人間であるらしい。

「……俺さ、けっこう星が好きでさ。いろいろ知ってるんだよ」

訂正、面倒な人間だ。

束は基本的に波風を立てないような人づきあいを心がけて、それなりに意見の会う人とは仲良くするスタンスをとっている。そんな束でも彼の言葉をすべて無視して帰ろうかと思う。というよりも実行しなくなってきた。

「例えばあの星。束ちゃんにそっくりじゃない？」

そういつて彼が指さしたのは、南の空に浮かぶ青い星。うつすらと見える二等星くらいの星を彼は楽しそうに見ていた。

「私に？」

「そ、束ちゃんに。あれはさ、一人ぼっちの星なんだよ。ここからじゃ分からないけど、あの星はかなり大きめの星なんだけど、意外なことに一つも衛星がないんだ。普通結構な大きさの星、それも質量も大きな星には衛星があつて一人でいることは少ない。あれは珍しくそういう孤独な星なんだよ」

「……それって私が一人ぼっちって言ってます?」

「そうだけど?」

澄ました顔で彼は言った。束は無性にその顔に苛立ちを感じ、今度こそ帰ろうと足を動かした。

「……じゃ、私帰りますね」

「うん、ばいばい」

そっけなく、私は機嫌が悪いとアピールをしつつ、彼に背を向けると、彼は何でもないようにばいばいという。

……なぜだろう。今束は負けたような気になっている。

フンツッと鼻をならして、彼の横に座った。

「あれ、帰るんじゃないかったの?」

「もうちょつとくらい話を聞いてあげてもいいですよ?」

束はあくまで自分優位にするために質問をかぶせた。彼はそれに苦笑しつつ、その仕方ないなあという顔に余計にイライラするOKと小さくいった。

「そっか、でも何を話そうかな。決めてなかったんだよ」

「どうせならさっきの宇宙の話でもしてみたらどうですか?」

「宇宙の？ いいよ。実はちょっと宇宙のことには詳しいつもりなんだ」

彼は楽しそうな光を目に宿していった。束は不機嫌さを隠さないまま、彼の話を一応聞く体勢を作った。

「そうだね。まずはこの空がなんで暗くなるって話からしうか」「知ってるのでいいです」

しかし不機嫌な束がまともに話を聞くはずがなかった。彼が話始めた瞬間にすぐさま声をかぶせた。顎を引き、手のひらを膝の上に載せ、下から仰ぎ見るようにし、かつ目に鋭い光をやどした迫力のその姿は案に彼に言っていた。

……得意げに私に話しかけたんだから、私の知らないことを教えなさいよ、と。

彼はあくまで彼女を天才と冗談めかして言ったわけだが、もしかして、と思いつつその迫力に冷や汗を一筋流しつつ、次の話を模索した。どうせならこの妙なプレッシャーの女の子をおどろかしてやりたいと思う気持ちがあったのかもしれない。

「……………じゃあ、星の光は何でできてるかって話を「それも知ってます」……………じゃ、じゃあ今見ている星の光はずっと「昔の光なんですよ。それを辿るとずっと昔のことがわかる」……………その通りです」

僅か一分撃沈した。

彼にはまだ壁が厚かったようだ。

彼は自分の知っている宇宙の知識　もちろん本からの受け売りだ

を総動員して束に話しかけるが、その程度の知識を束が持つていないわけがなかった。この後、彼の必死の抵抗が続くも、すべて束に知っているとわかれて、最後には間違っている発言。そこから地面を黒板に見立てた授業までされてしまった。いわゆる青空教室。先生はロリ美少女。しかも夜の公園。特定の趣味の人は偉く興奮するシチュエーションだが、もちろんいたって普通の彼はそんな危ない性癖を持っているわけでもない。で、最後に束の授業を聞いて、手帳にメモをしていた。

「 というわけで、ここがこういう計算式になるからロケット、
とういよりも衛星軌道上にある物体の軌道をこのバーナーで制御で
きるんだよ」

束は額をつうつと沁る汗をハンカチで拭き、ふうつと満足げに息を
吐いた。

「なるほどねえ……ここで微分積分が使われているとは……！こ
れからはもつと微積が好きになれそうだよ。にしてもよく束ちゃん
はこんな問題解けたね？」

「まあ束さんにかかれば、こんなのちょちよいのちょいだね。伊達
に未解の問題を解くのを趣味にしてないよっ」

おお、そりやすげえ。彼が尊敬のまなざしで見ている。

そこでようやく束がはつと気がついた。

………しまったー！ 微分積分を実際に応用して使う方
法なんて小学生にできるかー！

バンバン汗が出ている。今まで隠していた自分の才能の片鱗を近所
のお兄さんごとに見せてしまうとは、さすがの束も予想外だった。
言い訳をするなら……だってお兄さん聞き上手というか、なんかい
つの間にか説明してたんだもん。

……どうやら束にもよくわからない何かがあつたらしい。

「えっと、わ、私今日は遅いからもう帰るね！」

「ん、そうだね。ごめんね、こんな遅い時間まで教えてくれて」

「ううん！ 私も好きでやっただけだから！　じゃ、じゃあ、またね！」

「あつ！　束ちゃーん、できれば明日もよろしくねえー！」

「え、あ、はい！」

束は焦ったように飛びあがって、とうとう公園の外へと走り出した。

公園の周りには民家もなく、公園から遠めの見えなくなる位置まで走ってからようやく荒い息をつく。

「はあ……はあ……」

……どうしてだろう。

束はひんやりとした夏の夜の風に頬を冷やされていくのを感じつつ、今のいままで自分がしてしまったことを思っていた。

……なんで自分はあんなにいろいろなことを話してしまったのか。

多分束の思う限り、そんなことをしたのは初めてだった。生まれて家族以外に初めて、いや、家族にも見せたことのない自分の一面を見せてしまった。

……どうして？

なんでそんなことをしたのか。本当に束は不思議だった。なんで、ともう一度脳髓に考えるように命令をしようとして、すぐに思い改めた。脳裏に彼のデリカシーの無い顔が浮かんだからだ。

……なるほど。

束は一人納得する。あの男は面倒で、敬語すら使う価値もない相手だったということだけだった。

「そっか……うんうん」

……あんまり頭もよくなさそうだし。あの青年になら別に話をしても大丈夫かな。

束は一人うんうんと、顔を縦に振る。

「……面倒な相手には適当に相手してもいいよね」

隠れた民家から顔をだして遠目に公園の方を覗き見る。彼は束がいなくなったあととも空を眺めていた。束は見つかるかもしれない緊張感がなくなったことに息をもう一度吐いて、ようやく家へと帰るのであった。

……もちろん、本人は絶対に首を縦に振らないだろうが、意外に抜けているところのある束が、明日の約束に頷いていたことを風呂に入る前に気がついて、焦って冷たいシャワーを浴びて悲鳴を上げたのは誰にも言えない秘密だった。

少だけ雨が降っていた。空は暗く、雲に覆われている。これじゃ星は見えないな。

束は肩を少だけ落として右耳にあてた電話に集中する。

「でだ、私のほうの合宿もそろそろ終わりそうなんだ。だから遊びに行かないか？」

電話の相手は声を聞かなくても分かる。束にとって親友というべき少女　織斑千冬だ。

彼女は夏休みが始まってから合宿に長野の方まで出かけていて、こしばらく会えなかった。自他共に認める親友である二人に、これだけの時間合わないというのは、どうにもさびしくなる。

千冬も将来的に非常に強い女性になるとしても、この時点ではまだ幼い少女だった。

「うんうん、ちーちゃんのお誘いを束さんが断るわけがないよ！
いつがいい？　今がいい！？」

「馬鹿もの。今は長野だ、行けるか！……そうだな。合宿が終わるのが一週間後だから、来週の水曜日にしよう。空いてるか？」

「モーマントーイ！　束さんにまっかせておいて！」

電話越しで見られているわけもないが、束はゆらゆらと自分の部屋で踊っていた。途中からタップダンスが入るあたり、かなりのハイテンションのようだ。

「また連絡しばらく連絡できないと思う。とりあえず少し遅いが三時に駅前にしておこう。……忘れるなよ?」

「忘れないよ! 失礼しちゃうなあ。」

そうか、電話越しに千冬は笑う。しかし時間が近づいているようで、後ろから声がかかっていた。

「すまん、時間みたいだ」

「ぶーぶー、もっとちーちゃんと電話させろー!」

かわいく年下の生意気な女の子を装って文句を垂れる束の声に思わず笑う。

「ふふ、今日はもう切るぞ」

「はい。ちーちゃん?」

「ん?」

「あいしてるー!」

「はいはい、お休み束」

「おやすみー」

ポチッと束は電話を切った。

電話の後の寂しさには慣れない。

束は仕方ないと頭を振って、すぐに寝るのであった。

きっと俺の知らない何かが束さんと姉ちゃんの間であつたんだと思う。

それは、俺が知ることはなくて、知る必要が無いって姉ちゃんはいうはずでしょ。

……うん、ちょっと悔しいけど、姉ちゃんと束さんの問題なんだよな。

……俺はさ、別に束さんが嫌いなわけじゃないんだよ。

もうあんまり覚えてないけどさ、やっぱり俺には優しいお姉さんでさ、大切な人の一人なんだよ。

俺が一人で家にいるときにご飯作ってくれたりさ、さびしい時に一緒にいてくれたり、結構優しいところもあるんだ。

今日のあの人見てるとそうは思えないかもしれない。

でも……束さん、ほんとは　　やさしい、いい人なんだよ。

……ある人物たちの暑い夜の密会より……

第四話

くくある天才の独白よりくく

ずっとほしかったものは手に入らないと思ってた。

うん、私は諦めてた。

だってそうでしょう？

私が一番大切にしているもの（家族との平穏）を捨てないと、—
ほしいもの（才能を隠さずにすむ世界）は手に入らないんだもん。

手に入らないもののために、今持つてるものを捨てることは……私
にはできないよ。

そう、思ってたよ。

納得していたんだよ。仕方ないって。

それしかなかったんだ。そうやって諦めるしか方法がなかったんだ。

でも、手が届いてしまった。

私がほしかったものが手に入ってしまった。なにも失わずに。

だからこそ、私はそれを手放すことが嫌で、できなくて、許せなかった。

第四話

珍しくそう暑くない日だった。昨日の夜に降り始めた雨がしみ込んだ地面が暖かくなることはなく、都合よく曇りなことも重なってそこまで気温が上がらない。風もつめたいため非常に過ごしやすい日だった。

さて、そんなある日のこと。『普通』の少女である束は物陰に隠れてはちらちらと覗き見る、という行為を繰り返して行っていた。

「……うつう……なんているの？」

昨日の「明日はよろしく」の声にうなづいていた自分を何度も叱つて、結局約束を破ることに忌避感のある束は朝から公園に来ていた。束はこれで律義な性格なので約束を破ることはしたくないと思っている。しかし彼に会うのは昨日のことから気まずい。……あくまで束が一方的にそう感じているだけで、彼は何のことか全く分からないだろうが。

「……どうしよう」

ならばどうしようと案を考えて思いついたのが、今の現状だった。彼は約束の時間を決めていなかったたので、『朝早くに約束を守るために公園にいったけどいなかったから帰った』作戦である。これなら約束を守るために公園に行ったことにもなるし、彼に会わなくてもすむ。思いついた時には自分で、やはり自分は天才だったと納得してしまった。まさに自画自賛。

が、そんなのは絵にかいたモチ。まさか彼が朝早くからいるとは思わなかった。いたとしても昨日会った夜からだとはかり思っていた。

「これが意識の外を突くということ……ッ」

予想外の行動をとられた束のテンションもなぜかうなぎ昇りだ。とどまるところを知らない。

「ほんと、どうしよっかなあ」

一応頭の中ではこれに対する対抗策も持ってる。……さすがに今か

らずと待っているわけもないだろうから、時間がたってから帰ったところを狙って公園に行けばいいと。しかしだ、一般的な善悪の感性をもつ人間が自分を待っている人を、それこそ一日中待たせることに良心の呵責を覚えないのかと言われればそうではない。一週間もすれば忘れていくだろうが、それまでの心理的ストレスはなかなか来るものがある。束はそれが嫌だった。

とはいえ、彼の前に出るのもできない。むしろ勇気がない。

昨日の束は初めて自分を隠さずに人と話してしまった。あの千冬にですらほんの少し話した程度で、彼女の異常性と言うべき知識を誰かに伝えたことはない。だというのに……昨日のあれはまるでお酒に飲まれてしまった人間のような行動だったと反省するほどだ。

「はあ……」

地味に最近多くなってきた溜息を吐きながら、再び公園を物陰からのぞき見た。

……まだいるし。

彼はベンチに座りながらまた空を見ている。いつまで見ているんだろうか。もう束が来てから一時間は経っているのに。

というか、ぼーっと見ている彼が恨めしい。

……私はこんなに悩んで大変な思いしてるのに……！

あそこまで気の抜けた雰囲気の人にここまで惑わされている自分が憎い。

こうなったら……ッ！ お兄ちゃんが帰るまで……ここでは
てやる！

そんな彼の前に出るのはやっぱり癪に障る。どうせなら彼が帰って
すぐに公園にいつてやる、と半ば束も意地になってきた。

……こうして束の一方的な、実に、いやほんとに、マジで、くだら
ないプライド（あくまで束の）をかけた戦い（青年は戦いがあると
すら知らない）が始まった。

「わ、わたしの負けだよ……っ！..!」

束は泣きそうな顔をしながら彼の前に立っていた。

「え？ え？ どういうことだってばよ？」

まったく覚えのない束の表情に彼は焦っている。

「まさか……こんな時間までいるなんて、さすがの束さんも予想外だったよ……」

敗北の味を覚えた束はがつくりと肩を落とす。それもそのはず、現在時刻はPM8:00。朝のAM8:00から実に12時間もの間彼はベンチに座っていたのだ。さすがの束の彼の忍耐力の前には膝を屈するしかなかった。……物陰に立って待っていた束の足が限界で、文字通り膝を屈してしまったというのが正確な話なのだが、ここは天才の意地にかけて彼に悟らせなかった。

「え、もしかしてずっと見てたの？ なんだ、もっと早く出てきてくれればよかったのに」

「いやいや、束さんももっと早くに出たかったよ。……お兄さんが早く帰れば私も苦労しなくて済んだのに……」

「ん？ なにかいった？」

「ううん。なにも」

素知らぬ顔で彼女は言った。彼は不思議に思いつつも彼女に昨日の話の続きをせがむ。

「そう？ でさ、今日も悪いんだけど、ここ……教えてくださいっ！」

取り出したのは高校生が読むには厚い本。英語で書かれたそれは束が以前読んだことのある宇宙科学についての本だった。昨日の時点で彼が宇宙に並々ならぬ熱意を感じていた束はそれができたことを不思議に思わなかったものの、彼の熱意に首をかしげた。

……年下の子供に頭を下げてまで教わりたいことなの？

しかし束は彼がなんで宇宙に興味があるかを聞くことはせず、彼が渡した本を手にとった。

「なんだ、これか。結構前に読んだけど、これ簡単だよ」

「え、まじ？　そもそも英語が難しくていまいちニュアンスが理解できないところがあるんだけど」

束はパソコンで世界中の情報や、論文を読んでいる。もちろんその中には英語で書かれているものもあって、最初は苦労したが今では話すのも簡単なくらいにはマスター済み。彼のいうニュアンスが理解できないということが、実はよくわかっていない。だって読んで文字のごとくじゃないの？　とは束本人の談。……それが周りには理解できないということを根本的にわかってくれないのは、彼女の脳細胞が人よりも数倍多いからかなのか　が、とりあえず彼に説明してあげることにした。

「どう？」

「うん」

そっいつて彼が指さしたのは、教科書にはない本土独特の表現だっ

た。日常会話で使うような微妙な表現は、向こうに行かなくては覚えにくいだろう。もちろん高校生程度で使うような英文ではない。

束はなるほどと一つ頷いてから彼にこの英文を読んであげた。

自分は人に教えるのにあまり向いてないと千冬がいていたことから、彼にも教えるのではなく、理解してもらうように自分で努力する方向に仕向ける方針でいくらしい。実際には強いやる気のない相手には使いにくい方法だが、幸いにも彼にはやる気がある。

「ああ、そっか！ こう訳すればいいのか！ ……あれ、でもこっちと話がつながらなくね？」

「ううん。一応前のページでこっちの内圧についての説明があるからそっちを引用してみると……」

「なるほど、わからん」

「え、だからここだって」

「いや、そんな難しい単語、辞書なきゃ無理」

そうかな。小さく首を傾げた後に束はどの単語がわからない？ と聞いて、わからない単語の上に意味を書いていく。幸い文法は大丈夫なようなので、これでいいだろうと彼女は思う。

「ふむふむ、そういうことか」

「……ほんとに分かったの？」

「おう、いえー！」

はあ、とまた溜息を吐いた彼女は、彼のお調子者の様子にうらやましそうな視線を送り、そつと笑った。

「で、内容の方は大丈夫なの？」

「……………」

彼は小さく呻いて黙った。

「……………じゃ、最初のほうから簡単に説明してあげるから」

「……………よろしくお願いします」

「というわけで、ここが円錐形なのは空気を切り裂き空気抵抗を少なくし、かつ全体の空気の流れを壊さずにできるからなんだよ……と、もう10:00だね。今日は終わりにしようか」

「うい、ありがとうございます、束先生！」

びしつと音を立てながら、右手で敬礼。背筋は伸びていい姿勢だ。思わずこっちも敬礼したくなってしまふ。すでに夜の闇も深く、暗闇を電灯が道を照らすだけだ。そろそろ束も帰らなくては見周りの警官につかまってしまふ。というよりも、親が怒ってないかのほうが心配だった。一応連絡を入れたとはいえ、この時間はさすがにまじいだろう。束はこの後のことを思うと胃が痛い。それでもこの教師のまねごとのような時間を後悔しようとは思わない。

そんな束の気持ちを置いて、彼はベンチにもたれかかり大きく息を吐いて体の筋を伸ばした。二時間も集中して話を聞いていたために体の節節が固まっていた。そんなまったくこっちのことを見ていない、いわばレ

ディーの様子に気を配らない駄目な男に、束はにつこりと満面の笑顔を作ると、

「じゃ、ここまで訳して置くように、宿題だよ？」

と彼に囁く。そのページ数、実に100ページ近く。彼は青くなりながらもコクコクと頷いた。俺も学校あるのに……という囁きは先生役を地味に気にいつてきていた束の前には意味は無い。彼は学校

の授業中に翻訳することに決めた。せめて授業で大切なテストに直結するような部分はでるなと祈りながら。

「じゃ、私もう帰るね」

「うん。ほんとにありがとな」

彼は今も必死に自分が持ってきた分厚い本を見ながら、それでも束の方を向いて笑う。束はこういう人と知り合いになるのっていい経験かとも思いながら、同じく笑い返して、手を振る。そうして、二人は別れた。もちろん、また明日、声をかけることはわすれなかった。

夏の夜道で、鈴の音のような音が響く。小さな音は鈴虫の声に巻き込まれ、聞こうと思わなければ聞けないほどの大きさだ。それでも確かにそこに音がある。

「
」

そんな夜道を歩く音源は、束だ。

次々と変わる音の高さに鈴虫が合わせるような気分を一人味わいながら、彼女は踊るように家に帰っていた。小さな唇から洩れる音は飛んだり跳ねたり、とても楽しそうだ。

「
」

彼女自身もまた、少しだけ歩調が軽い。まるで踊るようだ。うすい水色のワンピースがゆらゆらと揺らめく。

「
」

彼女がこんなに機嫌がいいのは久しぶりだった、本人に覚えがないほどに。

くるっと彼女がターン。広げた両手が空気を揺らし、そつと風が吹いた。

また明日。

「ふふふ」

彼女は小さく微笑んで笑った。

さっきの彼の顔は面白かった。青くするという表現がぴったりの彼の驚きよう……どうにも笑みがこみ上げてくる。

まさか、まさか自分が教師のまねごとをするとは……そう思う自分がいる。こんなことになるとは思わなかった。不機嫌にさせられて腹いせのように彼の話すことにいやもんをつけていたら、いつの間に関に彼に物を教えることになるなんて思いもしなかった。もちろん、それは彼とこうして明日も会う約束をすることであり、同時に自分がそれを楽しんでいることでもあった。今まで束という存在の上に張り付いていた普通の仮面を彼の前でかぶることはなく、こうして『普通』にいられる。

そこではつとした表情を作った。

……敬語、忘れてた。

それもすぐに、まあいいか、と打ち消す。どうせ自分が先生なのだし、自分が敬語を使わなくてもいいでしょう。と一人納得する。もちろん、根本的な部分では彼の方が年上であることを忘れるつもりはない。しかしそれでもこのくらいはいいだろう。束は一人首を縦に動かして、また歩き出す。

思えばいつの間に敬語を使わなくなったのだろう。最初からのような気もしないでもないし、教え始めてからのことのような気もする。

どっちがどっちなんてどうでもいいことだが、本当に意識しないうちの脱敬語だった。

きつと周りの人が今の束を見たら、驚くだろう。いつも笑っているものの、どこか堅かった束の表情は満開ともいふべき表情だった。そんな表情を彼女が撮っていることは、きつとまだ知らない。

街頭に照らされた道が家までずっと続いている。周りには民家のみで束が歩くこの道に特にいうこともなくつまらない。でも今日の束は鬱屈を溜めることもなく、飛んでしまいそうなほど軽い足取りで結局家まで帰るのであった。

だから私はISを作った。

だから私は宇宙を目指した。

だから私は 世界を変えた。

彼が私を見てくれたから。

私は私のすべてを使って、きっと世界を私色に染め続ける。

それが私が彼にできたたった一つのことだから。

くくある天才の独白よりくく

第四話（後書き）

感想求む。
いやマジで。

第五話

〃〃ある教師の客観的『彼女』〃〃

えっと、初めまして。

私IS学園で教師をさせてもらってる　です。

わけあって名前は言えませんが、一応大人の女性なんですよ。

実は……今まで職場に女のひとしかいなかったのに、最近になって男の人が来たんですよ。

で、いろいろあって、この前初めてあの博士と会っちゃったんです！

とてもあのISを作ったような人には見えないんですけど、やっぱりあの人が作ったんですよね。

私が知ってる博士とは全く違いました。

やっぱり生は違いますね。

一応知識として知ってたんですけどね。

でも本当なんですネ

身内しか認識できないっていうのは。

あそこまでいないものとして扱われるなんて知りませんでした。

私を知っていたのは、あの人の外のことだけでした。

若くしてISという既存の技術をあらゆる点で越える発明を世に送り出した天才。

その美貌さえも神によって作られたようなその姿に、誰もが目を離せなかった、と言われている。

調べれば調べるほど、理解できないほどの技術の数々。

どうしてアレに誰も目をつけなかったのか、皆が首をひねるようなもの。

ISが登場した以降の歴史を語ることはいらないけれど、間違いなく博士だった一人の発明によって世界が変わった。

男尊女卑の世界から女尊男卑の世界へと、世界は姿を変えた。

それが博士。

それをたった一人で行ってしまったのが、博士だった。

それが私を知っていた博士だった。

でも、今日同僚の先生が教えてくれた。

あの人は好きでそうなったわけじゃないんだって。

誤解しないでほしい、博士は優しい人なんだと。

第五話

最近続いていたカラツとしていた夏の日。今日は日差しがきつく、道行く人の額を見れば誰もが暑そうに汗をかいていた。

束が教えることに面白さを覚え始めてから、彼に青空教室を開き始めてからすでに十日が立っていた。あれから変わらず束は厳しく彼にたくさん知識を教えていた。束もやる気が溢れてくるのか、自宅である程度調べて事前に準備を完璧にしてから授業に臨み始めた。おかげで彼の實力もうなぎ昇りだった。

今も二人はベンチに座って楽しそうに話していた。

最近は二人とも夜だけでなく、昼にも会うことが増えてきた。

そのすべてが束からの声なので、彼は特に気にしなかったが、束は他の人の誘いも断って彼と会い始めていた。

そんな夏の昼のこと。あまりに暑い日差しを忌々しそうに睨んだ束が、見事なまでの爆弾を彼に投下した。

「お兄さん。今日、家来ない？」

世界が止まった。

彼は完全に動きを停止。あらゆるエネルギーを放棄してしまった。

「……why?」

「it's too hot」

いや、そうじゃなくて。

彼は束に思わず声を荒げそうになった。同時にそれはまずいだろ、と。

あまり深く考えたことはないけれど、こうして小学生と毎日のように会う高校生という絵面だけでまずいというのに、赤の他人の高校生が小学生の家に入る。まずい、まず過ぎるではないか。

彼は束の家に行って紹介された時、束の親に通報される姿が瞼の裏に浮かんだ。

「いや、さすがにそれはご遠慮させて」

「でもほんとに暑いんだもん。これじゃ授業にならないよ」

「……でもなあ」

彼自身も額の汗をぬぐいながら、暑いと呟いた。

「だって39度だよ？ 日陰でも35度あるんだよ？ こんなので勉強できるわけないし」

現在の気温は夏らしい暑さだった。ベンチは日陰にあるが、それでも風邪すら暑い今日はとても集中して勉強できる状況ではない。

「どっかの公民館とかでもいいんじゃない？」

「周りの人の目に耐えられる？」

「おいおい。普通兄弟に見られて終わりだって。束ちゃんもお兄さんって言うてるし」

「……やだ」

「といわれても……なんで？」

「なんとなく……かな？ ごめん冗談。遠いから」

彼は頭の中に地図を浮かべた。確かにここからそれなりの距離がある。小学生には厳しいだろう。

「う、じゃあ、今日はやめておこうか」

「お兄さんは自分で勉強できるの？」

「一応できるんじゃないかな。最近は束ちゃんのおかげで英語も読めるようになったし。今日はいくつか知識の収集って奴に力を入れてみるよ」

「その言葉かつこ悪い。ナルシストみたいだよ」

「……うい」

「とにかくやだ」

そんなあ、と彼が天を仰いだ。

「そんなに私の家に行くの嫌なの？」

彼女は悲しそうに首をかしげた。

「別に部屋も汚くないし、変なおいもしないよ？」

彼がしぶる理由を考えて、自分の部屋が汚く見られているとしたら、悲しかった。

「昨日掃除機かけたから綺麗だよ」

彼はそれに小さく笑うと、そうだね、と小さく口ずさむ。

「ほら、束ちゃんなら分かると思うけど、一応俺にも世間体つてものがあってさ」

「そこまで他人のことなんて気にしないよ」

「あっさり言ってくれるね」

「だって私じゃないし」

束がにつこりと笑った。

「はは……そうっすか」

彼が乾いた笑いを上げると、余計に束が楽しそうな顔をする。

「ね、だからいこ？ ちゃんとエアコンもあるし。体にちょうどいい温度を保つ特別製なんだから」

腕をひかれた彼は諦めたように束についていく。何だかんだで彼は束の授業を楽しみにしていて、キャンセルすることはしたくないのだ。

「オーケー、オーケー」

束はよかったとにつこりすると、肘から手に変えて、彼を引っ張っていく。

「捕まっちゃったよ」

彼はめんどくさそうに頬をかいて、結局束の隣を歩くのだった。

運のいいことに東の家には彼女以外の家族がおらず、誰にも会いそうになかった。

……ちいさな女の子と二人っきり。

字面にとすると危ないことこの上ないが、あいにく彼はそこまで愚かではない。親にいろいろと言われる未来を回避したことに安堵していた。

「へえ、意外」

そんな彼が東の部屋を見た時の第一声がそれだった。

あまり女の子らしくないシステムの部屋。床にごみは落ちておらず、整理整頓が効いている。しかし生活感がないわけではなく、出窓や机の端にちょこんと小物が置いてあった。

彼の声に束は恥ずかしそうに俯くと、わざと元気な声で、早く座つてと彼を急かした。

束の照れ隠しに彼はまた楽しそうな顔を見ると、大仰なポーズをとりながら周りを見回した。

「おお、この机の上のねいぐるみはウサギか。束ちゃんらしくてかわいいね」

「もう、お兄さん！ 勉強しに来たんだから、そんなことしないでいいんです！」

彼が手にとって感心したような声を上げる。束はとうとう我慢できなくなつて、俺のところまで飛ぶように近づいて彼を無理やり座らせた。

「くくっ」

彼がそんないつもの束とは違う姿に可笑しそうに喉を震わせる。

「うっっ」

束は彼を睨む。いつもは理路整然と彼にたくさんの専門知識を教える彼女だが、今の姿は小学六年生の女の子。

「ばかあ！」

ポスポスと彼を叩く姿は、六年生というよりも二年生くらいか。少なくとも彼には愛きょうの感じられる姿だ。

「いめんいめん、まじめにやるからさ」

ちよつとテンションが上がってたんだよ。彼はニヤリと笑った。

「……そんなデリカシーのないことしてると嫌われますよ」

叩きたりないのか束が不満そうに彼を睨む。

「わりー。でもなあ……いや、なんでもない。ちゃっちやと昨日の続きを教えてくださいますか」

少し分が悪い。彼は気づかれないように次の話を持ってきた。もちろんその程度の話の流れの機微を分らない束ではない。口をとがらせて不機嫌さをアピールするも、彼は見てないふりをしたまま衛星について書かれた本を取り出し、昨日まで使っていたページを開くのだった。

結局、そんな彼の姿に一度息を吐くと、彼女はいつものように彼に勉強を教えるのだ。

束は彼のノートに簡単な解説を書きながら、ふと思った。

……どうして彼はこんなに頑張るんだろう。

以前はどうでもいいと切り捨てた理由が、なぜか自分の部屋で勉強をしている今に限って気になった。それは自分の部屋と言うある意味で一番安心できる環境で余裕ができたからなのか。束には判断できなかった。

すこし難しい論文を読みながら彼がうんうんとうなっている。

束には簡単に理解できたそれも、彼のような普通の人には難しいようだ。

以前までならば、簡単に理解できないことにいらいらとしていた自分。しかし、今は彼の困った姿を見ていると自然に笑みが出る。彼の様子は束の琴線に触れるのだ。今までにそんなことはなかった。教えて理解されないストレスと戦うのが、束と言う少女だった。

さらに言えば年下の少女にわざわざ頭を下げて教わりたいと思うのだろうか。

束は人に教わろうと思ったことがない。

だから余計にそうしてまで宇宙へと足を進める彼の姿が不思議だった。

束は頭をがりがりと書いてノートにまとめいていく彼をじっと見る。よほど集中しているのか、そんな束に気がつく様子はない。束は髪がぼさぼさになっていく様子を克明に眺めていた。じっと見ているとこの一週間では気がつかなかったことがいくつもあった。

容姿はやっぱり普通だった。前はなかったニキビが出来てる。束は栄養のバランスが悪いのかな。と心配しながら、もっと見た。

……少し鼻が高いかな。日本人にしては珍しいかも。あ、唇はプルプルしてる。ちょっと光ってるからリップでもぬってるのかも。

「……………ああ、わかんね！ 束ちゃん！ ここ教え……………て、ってどうしたのこっちみて」

じろじろと観察されていることなど梅雨と知らず、彼が声をあげて束をみた。

「え、な、なんでもないよ！」

まずい、と思わず焦る。

あわあわと胸の前で手を振り顔を見られないように俯かせて、彼のノートをみた。幸いにして彼はそんなに束の顔をじっくり見なかつ

たので何も気がつかなかった。もしじつくりと見られていれば真っ赤な顔を見られていただろう。

「どこがわかんないの？」

なるべく動揺を隠して声が震えないよう気をつけて言った。

「えっと、ここ。なんか本文読んでもさっぱり。宇宙での活動における放射線とその影響とかいわれても……」

「そっか、今まで軌道とかの計算ばかりだったもんね。そういう系統はまだやってなかったね。……とりあえず今日はそこを飛ばしてやろう。明日そっち関係をやるから」

束がすぐに彼のできない原因に思い当たると、明日のカリキュラムを組んでいく。

次はどんなことをやろう。どうしたら彼は分かりやすいかな。

束が好きなのがこの次のことを考える時間だった。でも、今日はちよっと違った。さっきまでの何でという疑問が束の意識の片隅に常に取り、どうしても気になってしまったのだ。

「……ね、おにいさん」

どうしても、気になる。

今までだったら絶対にこんなこと考えなかった。考える必要がなかった。自分のことで手いっぱいなのに人のことまで手は出せなかったのだ。

でも今は知りたい。すごく、知りたい。

彼がどうして宇宙を夢見るのか。あんな真空の、とても人の生きてはいけないような世界に彼がなぜここまで魅了されているのか。それが知りたい。

もしかしたら、それは自分にとってなにか大切な何かになるかもしれないから。

束はそつと、薄桜色の唇を開く。

「どうして、そんなに宇宙へ行きたいの？」

彼は笑った。束の真剣な様子に気がついてなお、彼は笑った。

「今頃聞くなんて……とりあえずここはお約束的に言うておこうか。今更どうしたんだよ」

「今更つて……ただ聞いてみたくなっただけだよ。……ちよつと聞くのは遅くなつたかもしれないけど」

ばつの悪そうな顔をしてしまう。それでも彼から目を離さない。

「そうだなあ。別に大したことじゃないんだけどな」

「大したことだよ。普通は年下の、それも小学生に頭下げてまで教わろうとは思わないよ」

「そついえばそうかも……」

「それだけやりたいから勉強してるんでしょ？ その理由が、私は知りたい」

彼がうなルような声を出す。迷っているように見える。

「うーん、ま、嘘はいけないか……」

しかし彼は隠すようなことでもないかなというところ、どうということもない晴々とした顔をして束をみた。

「これには海よりも深く、山よりも険しい理由があつてな」

束はあんまりな導入にがくつと肩を落とす。それでも彼ならこんなものか、そう納得して耳を傾けた。

「笑っちゃうかもしれないけど、俺宇宙飛行士になりたいんだよ」

「宇宙飛行士？」

「そ、あの宇宙へ行っているいろいろな実験やら観測やらをする仕事」

彼は束から目を離れた。その視線が捕えたものは彼が持っていた携帯の待ち受け。アラスカでとられた星の瞬く夜空の写真。彼はそれを見せてきた。

「これ、親父がとった写真なんだ」

その写真は美しかった。携帯の画面では洗わせる画素数なんて大したものでもないのに、束の心を掴んで離さないような魅力があった。

日本では見れない天の川が綺麗な青を描き、一等星がその存在を見せ付け、小さな星の光ですら七色に輝いている。

「すごい……」

知らず感嘆の息がもれた。

「だろ？ 俺もさ、初めてこれ見た時は感動した。実際に見てみた……本気でそう思った。でさ、それを親父に行った時、親父が言っただ
宇宙に行けば地球上のどこで見るより綺麗なんだぞ
って」

誇らしそうに胸を張った彼が、自分もまたこの写真の魅力に取りつかれたことをうれしそうに見ていた。

「それがきっかけ。別に大したことじゃないだろ？ その後はいつの間にか星座の本とか買ってさ、いろいろと調べてるうちにね、いつか宇宙に行きたいって本当に思ってたさ」

彼が恥ずかしそうに俯く。自分の夢を誰かに、年下の女の子に語る事が恥ずかしかったのかもしれない。

……別に恥ずかしいことなんかじゃないよ。

束は口に出しそうになった。

……私なんて……

今の自分と彼の夢を語る姿。どちらの方が正しいのか。家族か、夢

か。他人か、自分か。

束は知らず彼をじっと見ていた。

……もしかしたら、ううん、私はうらやましいのかな。

眩しい。彼の姿が束には夜空に輝く星のように眩しかった。人口の光に負けてしまうこともある星の輝き、それでもそこに確かに存在し、今も誰かを魅了し続ける星の光のような彼が、束はうらやましかった。

「でも、実はさ。本気で目指そうと思ったのは
束ちゃんのおかげなんだ」

自分の矮小さを思い知らされたような気持ちになって、気分の沈み始めていたとき、彼が言った。思わず彼の顔をまじまじと見てしまう。

……私が？

何かしていたのだろうか。

自分が彼にできたのだろうか。

彼のような一人間（夜空の星）に私なんか
何かできたのか。

「私……何ができたの？」

「たくさんのことを。束ちゃんは俺にたくさんのことを教えてくれ

たよ」

彼は満面の笑みを作ると束の目をみた。

「今まで本当は宇宙飛行士になろうって本気で思ってたんだ。英語だって読めなかったしね。束ちゃんが俺にいろいろな宇宙のことを教えてくれたから、俺は本当に宇宙に行こうって思えたんだ」

束は思わず口に手を当ててしまった。それは体の奥底からあふれ出る何かをせき止めるためだった。

「だから束ちゃん

ありがとう」

束は必至でそれを抑えた。

自分でも分からない衝動が視界をにじませる。

……私でも、何かできた。彼みたいな人に何かできた。

人とは違う自分が、できたことがあった。

なぜだろう。それがとてもうれしかった。今までいろいろな人にお礼を言われてきたのに、彼に言われた時、束は体が震えるほどの感情の渦が生まれた。

それは彼だけが束がなにも隠さないで話をできた人だったからなのか。素直にいられた人に、こうしてお礼を言われたことが束にとってどれほどの価値があることなのか

束は自分でもわからなかった。

束は何か言おうとするけれど何を言えいいか分からず、ただ首を縦にふった。

「まだ遠い未来かもしれないけどさ、俺が宇宙に行って地球を眺めたらさ、その時ももう一回言うから 束ちゃん、俺はここまできたぞ。ここまで来れたんだ。どうだ、俺は夜空に映ってるか？……ってね」

その言葉は鈍い人にだってわかるだろう。暗に言っていた。

私のおかげだ。ありがとう。

そう意味が込められている。束は誰よりも早く、それがわかった。

「……聞こえないとは思っけどね」

彼がはにかむように言った。

束は心の中で何度も何度もそれを否定した。

「うっん、ちゃんと……聞こえるよ」

自分にその言葉が聞こえないわけがない、と。地球からどれだけ離れていても、彼がそういつてくれる言葉が、声が、聞こえないわけがないのだから。

「私だけはちゃんと聞いてるから」

彼は少しだけ息を飲んだ。

「……そっか。そうだね。束ちゃんにだけは聞こえるかもしれない」

「そうだよ。私には聞こえるんだから……だから、ね。ちゃんと私に声を届けて、約束……だよ？」

自然と束の頬が緩んでいた。

「……そうだね。約束だ」

彼は束の頭の上に手を置くと、そつと撫でた。

髪型が崩れるとか、子供扱いされてるとか、そんなことも忘れて束は目を閉じてそのぬくもりを味わう。彼の指先から伝わる温度は、どこか気持ちよかった。

温かい湯船の中にいるような、そんな感触。束はすつと目をあけると、今までのような自然な笑みを消してニヤリと表情をつくった。

「ならちゃんといけるように勉強しないとね」

「そうだなあ。もっとやらないとね。……しばらくは付き合ってくれるかな？」

彼は内心、これ以上は時間的にきついかも、と思うが結局撫でられるままの束に促されるように頷いて、そして彼女を誘っていた。

本当なら小学生を巻き込むことは褒められることでもないし、いやそもそも巻き込むこともできないか。

とにかく彼は束とこれからも会うことを約束していた。

「もちろん。私はお兄さんの先生だからね。最後まで教えるんだから」

そんな彼の誘いを笑ってうなずいた東の心の仲は、何をいまさら、だった。

……もうどれだけ教えたと思っているのか。これくらいで済むと思っているのか。

彼女は笑う。

久しく誰にも見せていなかった、彼女本来の笑み。それを顔いつぱいに広げ、ひまわりのような表情と楽しそうな雰囲気を見せて、彼女はいった。

「だからもう、逃がしてなんて

あげないんだから！」

第五話（後書き）

感想、誤字等ありましたらお願いします。

第六話

〃〃ある科学者の独白〃〃

私は神様を信じてない。

でも殺したいほど憎んでる。

目の前にいるのなら八つ裂きにして殺しちゃうくらい。

でもないと思うてる。

ちょっとした矛盾。

殺したいけど、いないと思ってる。

いるのかな。

いないのかな。

別にどっちでもいいんだけどね。

もう関係ないし。

私が何度も何度も後悔する一瞬は過去のことだから。

神様も過去へは戻れない。

だから、いいんだ。

きつとどれだけ科学は発達しても、時間を人類が手に入れることはない。

だって

私ができないんだもん。

私ができないことを、どうして他の人ができるの？

だからこの先、どう頑張っても人類は過去へ行けない。

だから、もういいんだ。

第六話

もうすぐ火曜日の今日が終わって、明日は水曜日になる。それまでの後十分で束は空を見上げていた。

今日家に来てくれた彼の語った　夢。それは誰にでも成れるわけではなく、努力を重ねた本当に一部の人間だけが達成することができる夢だった。

束は彼がうらやましい。自分のおかげで成る決心がついたと語ってくれたことはうれしかったが、束はそんな夢を持っている彼がうらやましかった。彼のような夢を持って輝いてみたい。そう思っしまうのはごく自然のことなのだろう。

束は彼に影響されたように空を見え上げて星を見ていた。

……いつか彼もあそこに行くのだろう。

空気は無く冷たい暗闇の海へ。

あの場所は危険でいっぱいだ。とても絶対安全とは言い切れなかった。もしかしたら死んでしまいかもしれない。

束は背筋が冷たくなった。

……お兄さんが死んじゃう？

気がつけば束は机に向かっていろいろな図面をかいていた。

……これ……は？

自分でも無意識と言う他にないような、いつの間にかの作業だった。それでも彼女がよく見ればやはり自分の書いたものだったとわかる。こういう所に自分の規格外さが出てくるのだ。

束が見つけた特殊なエネルギーを原料とし、持ち主に何らかの外的要因による事故がせまった時、それから身を守る機械。のちの『絶対防御』の原型であった。

そっと溜息を吐いた。

……私も、周りを気にしないでできたらなあ。

彼の夢を追う姿にあこがれた束。しかし彼女自身も夢がないわけではない。むしろ明確な夢をこの年で持っていた。

しかし、彼女にそれを叶えようとする意志はない。

家族に迷惑をかけてまで、彼女は自分の自尊心を満たすという行動をするつもりはなかった。

……隠しておくことが……最善、なんだよね。

束は目の前にある図面を一取り眺めてすぐにゴミ箱に捨てた。

宇宙は危険な場所で、彼が怪我をするかもしれない。でもそれは今じゃない。

……まだ必要ないよね。

ゴミ箱に入った図面が視界の端に映る。

……でも、これがあればお兄さんが怪我すること……なくなるんだよね。

自分が作った発明品がどれだけ優れているかなんて束は百も承知だ。これを彼に渡せば彼が怪我をすることもなくなるだろう。だが、束は彼のためにその図面から機械を作ろうとは思えなかった。

……お兄さんなら大丈夫。大丈夫……だよ。

あれだけ自分が普通の小学生でないと見せつけておいて、今更になつて怖くなった。

彼はまだ束のすべてを見たわけじゃない。まだ、束の知能が優れていることだけしか知らない。束が自らもつともおかしいと思うこと、天才ゆえの『発想力』。

それを彼に見せたくなかった。

束の持っている力をみた彼が、束に対する態度を変えるんじゃないか。

そう思うだけで彼女はそれを作れなかった。

……お兄さんに嫌われるのも、よそよそしくされるのも……いや。

だから彼女は作らない。

あらゆる発明を。その脳髓からあふれる輝かしい至高の発明品の数々を。

彼女は隠し続ける。

彼はもう大切なものだから。

……知らないよね。そうそう怪我することなんて、ないよ。

その優れた頭脳で考える。

あれがなければいけないような事故がそうそう起こるわけがない、と。

心の奥深く、束に誰かが話しかける。

大丈夫。

まだ知らなくても大丈夫。

もうちょっとだけ続けられるよ。

ね、だから……

知らず束の視界から空が消えていた。

見上げればさっきまでの空に雲がかかっていた。

束は何ともないその視界の中で、ふと思った。

「明日、晴れるといいなあ」

束はいつもの待ち合わせ場所で彼と話しながら、頭の片隅でこんなことを考えていた。

……これどうしよう。

さっきからずっと悩んでいる『これ』とはポケットに入っているあの物のことだった。それは丸い球体で特に装飾もない。手のひらサイズのボールだ。

しかしこれが外見に反し既存の科学力を上回る技術力が終結された発明品であることを誰が想像できるだろうか。持ち主に何らかの脅

威が迫った時、オートで対象者を守るのちの『絶対防御』のプロトタイプである。一回限りとはいえ、もし世界に売り出せば瞬く間に広まることだろう。

昨日散々悩んで、結局褒められるかもしれないと思って作ってしまった。

残念なことに彼を目の前にして、嫌われたりしたらどうしようとの足を踏んでしまった束は未だに渡せていない。

ポケットで自己主張を続けるそれに意識を先ながら束はどうしようを考える。

1・普通に渡す。

一番無難な選択肢、しかしそう簡単にそれを選ぶわけにもいかない。もしこんな普通じゃないものを渡して束と彼の関係が壊れたら本末転倒なのだし。

2・渡さない。

つまりは現状維持。束が選ぶとする選択肢の中で一番簡単に選べる選択肢だろう。勇気を出す必要もないし、今のままでも十分に楽しい。むしろこれを渡してできるメリットは彼の身の安全と、あるか分からない彼からのお礼だけなのだし。いや、彼ならきつとお礼を言うだろうけど。

3・まずは彼がどんな反応をするのか探してみる。

なるほど、デメリットもないし、これでうまくすれば渡しても大丈

夫かわかる。最高の選択肢だ。ただ、束にそういった言葉を誘導する才能がないということにぬかせば、だが。やろうと思ってもそれとない言葉がまったく思い付かない。信頼できる人には口下手なのだ。

三つの選択肢から選ばないことなんてできない。

このまま逃げ続ければ現状維持、つまり2を選択したことになってしまふ。別にデメリットがあるわけでもないから無理にそれ以外を選ぶ必要はないだろうが、褒めてもらえるという餌を前にして束は未だ決心がつかなかった。

もしかしたら褒めてもらえるかもしれない。認めてくれるかもしれない。

それはギャンブルのときの『当たるかもしれない感覚』に似ている。

そう簡単には抜け出せない。事実束も抜け出せていなかった。

「束ちゃん？」

彼が束の顔をのぞきこむ。

「え、ええ！？　なに！？」

束はいきなりアップで映った彼の姿に飛びあがって距離を取った。

「いや、心ここにあらずって感じだったから」

「そうだったかな？」

「そうだったよ。ばーっとしてさ。体調悪い？」

彼が束の額に手を伸ばした。手のひらで体温を測ろうとしているようだ。束はそんな手を一瞬振り払おうとするが、蛇のような動きをした腕に振り払おうとした腕は避けられて、結局なすがままになる。

「大丈夫」

「本当に？」

「本当。でも……もしかしたら体調悪そうに見えるのは昨日夜更かししたからかも」

特に彼も束の体温が高いと思わなかったのだろう。首をかしげたタイミングを見計らって言った。……内心夜更かしの話になって、これは話を切りだすチャンスか？　とも思ったが、今は様子見に徹することにする。

「夜更かし？　束ちゃんも夜更かしとかするんだね」

「む、それってどーいう意味？」

「え、ほら。夜更かしは美容の敵！　とかいいそうだから。束ちゃんって肌きれいだしね」

彼が束の頬を突つついた。何かしてるの？　彼が言ったので束は特になにも、と返した。実際は自分で作った機械に肌をきれいにするマッサージその他をさせているが、ここは謙遜しておく。

そんな束の言葉に彼が大げさに驚いた。本当に何もしてないと信じ
たらしい。まだまだ女の子に慣れてないなあと思いつつ束は話を
変えた。

「ありがとう。……で、もうさつき出した課題は終わってるの？」

「もちろん。終わってるから声をかけたんだよ」

そういつて彼はノートを見せた。覚えることではなくて、応用的な
新しい考えを自分で生み出す勉強をしていたのだが、絵つきで分か
りやすくまとめられていた。

「ふーん。なるほどねえ。……うん、合格ー！」

束は大きく腕で作った。

「まあ先生の腕がいいからな。合格しないと怒られちゃうよ」

彼は言った。束の信頼にこたえて見せる、と。

「いうね。でもまだまだ。もっと知らなくちゃいけないことはた
くさんあるんだから。それに体も鍛えないとね」

「そっちのほうも一応やってるよ」

「やっぱり宇宙飛行士は体も鍛えてないといけないよねえ」

「でも鍛えても無重力のせいですぐに骨が弱まるっていうのが……
なんとも言えないけど」

「でも、行くんでしょ？」

「もちろん」

教え子の頼もしい姿。彼はこの僅かな期間で大きく成長していた。それこそ人生経験の少ない束でもわかるほどに。

「ふふ」

別になにも笑う所なんてない。それでも束の唇から笑みがこぼれた。

……ああ、楽しい。

本当に楽しい。

束は自分で今、この瞬間が満ち足りていることを自覚した。

別にきつかけなんてありはしない。

ただ二人でこうして教え合って、彼の姿と成長を認めて、自分のことを隠さずにいられて、束は自分がどれだけ恵まれた位置にいたのか、そのすべてを悟った。

心が軽くなる。体も軽くなった。

どんどんと体が熱を持っていく。

束は自分でもそれを止められない。どんどんこぼれるこの楽しさはどこから来るのだろうか。

……彼に見られたら恥ずかしいかも。

そう思っても止められない。

必死に束が出した課題を解いていく彼の横顔を束は見る。こっちを見てくれることはなさそうだ。束は残念そうに肩を落とす。その時に視界も下へと落ちて、あるものを見つけた。

彼の手が、あった。片手で本を上げて見ている姿でもう片方の手がペンを持ったまま残っていた。

じっとそれを見る。

束の小さな手よりもはるかに大きかった。

父の手よりも大きいのかもしれない。男の人特有のごつごつした手。自分のは凹凸の少ない滑らかな手で、彼のとは似ても似つかない。

それを束はじつくりとみた。

彼の手はこのじめじめとした夏の空気でも乾いているように見える。

でも見えるだけで、本当は汗びっしょりかも。

束はそんなどうでもいいことが気になった。基本的に束は研究者らしい性格で、気になったことは調べないと気が済まない。だからだろうか。気がつけば彼の手に束の手が重なっていた。

「うえっ!?!」

意外とすべすべしている。あくまで見た目だけがごっこつとしているらしい。

なぜか開いた手にそつと指を這わせて彼の指を掴んだ。爪もよく手入れされていて、程よい長さで切り揃えられていた。まるでネイルをやっている女の子のような気のつけ方だ。束は男のくせにと感心してしまった。

「ええっ!？」

裏返して今度は内側をなぞる。

あんまり信じないが、友達とよく話す手相を見てみた。生命線はあんまり長くないが、金運は自分よりも長かった。

「ちょ、ちよつと!」

触った感じ、もちもちとする。べとべとしているわけじゃない。かなり触り心地がよい。束にとってちょうどいい人肌の温度だった。

片手だけでなく、束は両手で彼の手を包み込むようにして掴んだ。

そのときビクリと彼の手が震えるが、そんなことどうでもいい。束は本能が欲するままにその手を自分の頬へと持っていく。

……温かい。

この暑い夏でも、彼の手は心地よかった。

「た、束ちゃん……?」

彼が束の行動に我慢できなくなって肩をゆする。その顔には正気をさぐる色があった。

「ん……？」

束が上の空で返事をした。目がとろんとなっていた。

「あの、そろそろ話してくれると……うれしいなあ」

頬をかいて、彼はいった。

「え……………」

束は目をパチつとした後包み込むようにして握った手へと視線を移して、彼をみた。その顔は真っ赤だったことは心にしまっておいた。

次第に瞳孔が開いていく。

……ああ正気に戻ったんだな。

急な動きをして束を驚かせないようにしながら、後の爆音に備えて耳をふさいだ。彼は危険にはわりと敏感な方なのだ。

「ふにゃあああああああっ！！」

そうして束は真っ赤な顔で叫び声を上げるのであった。

束が真つ赤な顔で叫びをあげ、からかわれていた場所から離れたところで女の子が二人の様子を見ていた。

少女の名は織斑千冬。自他共に認める束の親友だ。剣道に力を入れているのが特徴の将来有望な美少女だ。

そんな彼女は、今自分が見ている風景が信じられなかった。

いや、信じたくなかった。それが本音だったというべきか。

親友の少女が年上の男の人とベンチで笑っている。

言葉にすればそれだけのことだ。

詳しく語るのならば、親友の少女が見たこともない顔で、年上の男の人と自分の約束をさぼってベンチで笑っている、だろう。

千冬は剣道の強化合宿に参加していて、今日やっと帰ってきたのだ。いつもさみしがり屋で自分に付きまといてくる束だが、それでも親

友なものには変わりなくて、千冬も長い間会えなくてさみしかったりもした。電話越しの口約束とはいえ、千冬は確かに束と約束したのだ。来週の水曜日三時から遊びに行こう、と。

だが、実際はどうだろう。

待ち合わせの場所にはいない。……それだけなら良かった。束が自分との約束を忘れるなんて考えられなかったが、それでも行けないときはあるだろうと納得できた。……できたはずだった。

彼女が千冬にさえ見せたことのない笑みを見せていなければ。

あの笑みはなんだろう。

千冬は思わず自分に問いかけた。それほど今の束は千冬の知っている束と違っていた。

今だからわかるが、束はもつと影のある笑いをしていなかったか？

あれほど彼女が無邪気に声を張り上げたことがあったか？

見る人を引き込むような表情を 見たことがあったのか？

千冬は公園の外、網の向こうから束を見ている。

今の自分の表情は、一体どうなっているのか。彼女は自分でもわからなかった。

なぜ、とも、どうして、とも思った。

考えても答えは出なかった。

ただ、分かったことは、束が自分よりもあの男の人を優先させたということだけ。

……それだけわかれば十分だった。

千冬は聞こえるはずもない距離でも、極力音をたてないようにゆっくりと振り返る。

束がああして笑っているところを見たくなかった。

合宿でまた少し強くなったと、そう思っていたのに、実際はそうじやなかったらしい。千冬は自分の心の弱さを笑い、そっと公園から離れていく。

……逃げているのだ。

千冬は親友だと思っていた束が、こうして自分よりも優先する人間がいて、自分のことを忘れて笑っている姿を、これ以上見たくなかった。

だから、逃げる。

自分は何も見えていない。

また明日も時間はある。そう自分に言い聞かせて、どうにかして言い聞かせて、千冬は帰ろうと足を動かす。内心、震える体を隠して、気がつかないふりをして、彼女は歩いた。

そう、いずれ強大な力をもつであろう彼女も、今はただの女の子でしかなく。自分の弱さとは向き合えぬほど弱かった。　彼女は自分が壊れないようにと、内心で悲鳴を張り上げる強さしかもっていなかった。

「　　ちーちゃん……？」

だからこそ、彼女の耳にその声が届いたのは　必然で、避けられない運命だったのだ。

束は見てしまった。

彼と笑い、口にてを当てて笑い声を我慢していた視界の中に
親友の後ろ姿を。

来週の水曜日にしよう。

頭の中に響いた声。よく覚えてる。先週の夜に千冬の合宿の終わりに
合わせて遊びに行こうと約束したときの会話だ。

時間は三時にしておこう。

今は……何時だ？ 針はとっくに三時を過ぎている。

つまり……自分は 一千冬（親友）との約束をやぶった？

さあっと血の気が引く音がした。

視界の中に彼女がいる。それだけのことを束は認識できなかった。

「ちーちゃん……………」

本当に千冬なのか？ 確かめるように声がでた。

瞬間、彼女が走って逃げた。

その後ろ姿に彼女は偽物だと叫ぶ自分と、追いかけると騒ぎたてる
自分が生まれた。

「え？ え……？」

「……たばねちゃん？」

駄目だ。束の頭の中で約束が何度も響いて、彼女の体が何度も震えた。

「は、はやく追いかけないきゃ………！」

束は震える手足に力を入れて走り出す。千冬の走りそうなルートはすぐに思いつくから、もう見えない位置に行った彼女を追いかけるのはそんなに難しくない。けれど面と向かって彼女に何を言えばいいのかまったくわからなかった。

体の奥底から頭の奥までぐるぐると震えた。

どうして逃げるの？

疑問が喉まで浮かび上がる。

どうして、どうして？

冷静な思考の一部が茶番だと吐き捨てる中で、束はずっと走ってる。千冬の家まで最短距離を思い浮かべて先周りをする足に淀みは無いが、表情は淀んでいる。

全力で後先を考えないままに、道を曲がる。

「ちーちゃん!!」

束は一気に近づいた彼女の背中へと声を張り上げた。

不自然なくらい千冬の体がぴたりと止まる。

「た、たばね……」

束が見つめる中でゆっくりと振り返った彼女の瞳が不安そうにゆらゆらと揺れていた。

「ちーちゃん!……」

……何を言えはいんだろう。

結局思い浮かびもしなかった言葉を探して口を開いては閉めた。中途半端に手が持ち上げられる。

「どう……した?」

千冬が小さくつぶやいた。息を飲む束の耳には小さな声すら耳へと正確に届いた。

「あの、あのね。ち、違うんだよ……」

「何が?」

「だから、えっと、その……私……っ!」

束はまとまらない頭で必死にいい訳を考えた。

忘れようとしたわけじゃないよ。

意地悪したわけでもないよ。

私はちーちゃんとの約束楽しみにしてたんだよ。

しかしその言葉に説得力はあるのだろうか。いや、無い。千冬からすれば全部言い訳にしか聞こえない。

混乱した頭でもそれくらいわかる。

「わ、わたし……」

だから呻くように意味のない言葉を吐き続けるしかできなかった。

「……私……だから、何？」

束の目を見ながら千冬が口を開く。その目から束は視線をそらした。とてもではないが見ていられなかった。

「私……今日は、その」

「言い訳は聞きたくない」

鋭利な刃物のような言葉が束の言葉を切り裂いた。

「……………忘れてた？」

千冬の言葉に束が勢いよく首を振った。

「そんなことない！」

「ならなんで来なかった!？」

大声に束の肩が震えて、一步後ろへ足が下がった。

「だって……」

「だって……なに? どうせ 忘れてたんだらう?」

千冬は吐き捨てるようにいった。束はそんな彼女の様子に言葉もない。そんな姿に千冬は余計に苛立つ。

いつもなら完璧に制御して見せる感情が、今ばかりはどうしようもなかった。

「どうせ私よりもあのの方が楽しいんだらう? だから私との約束を忘れてあんなここにいたんだ!」

千冬は吠えた。その表情は泣きそうで、我慢できないような苛立ちを混ぜた表情だった。

「ち、違うよちーちゃん!」

「違うない!」

束はそんな千冬を落ち着かせようと声を張り上げるが、千冬は聞かなかった。

……どうしてだろうか。千冬には束の言葉のすべてが苛立ちと共に

言い訳のように聞こえるのは。肌が逆立つように苛立ちだけが募る。

「私だって覚えてたんもん！ 約束だって何処に行こうとか考えてたもん！」

「……！！！」

千冬の袖を掴んで束は言った。このまま千冬が友達じゃなくなってしまうような背筋が冷たくなる予感に襲われたからだ。

それを千冬は思いつきり腕を振って振り外した。

「いまさら つ！……… もういい。私は帰るっ！！！」

目の前が真っ赤に染まったような気がした。束の話した覚えていたという言葉がまったく信じられない。

「……っ！？ ごめん！ ごめんなさい！」

束が千冬の袖をもう一度掴んで言った。

喉が張り裂けそうな声でも、彼女は構わず声を上げる。

思いつきり掴んだ部分にしわがついた。千冬は睨みながら手を叩いてグングンと歩き始める。

体勢が崩れた束は転びそうになっても千冬を追いかけた。

「ごめんなさい！ 謝るから！ ねえ、お願い！ 待ってっ！」

伸ばした手が空を切る。

千冬は後ろから聞こえた声を無視して歩いた。

「ちーちゃん！　お願いっ！」

いらいらする。東は少しくらい困ったほうがいいんだ。

「まってよ……」

東はもつれそうになる足を必死に動かした。今までにないくらい力を入れた。それでもしなければ震えて動きそうになかったから。

次第に遠ざかっていく千冬の背中を見ながら走った。息が切れても、足が震えても、東は走った。周りのことなんて何も考えずに。

……そんな彼女がそうなることは必然だったのだろうか。

東の視界の端に巨大な物体が映る。

気がついた時にはもう　遅すぎた。

東は千冬を追いかけることに集中しすぎて何も見えていなかった。今自分がいる場所さえもわかってなかった。

彼女が追いかけている場所は歩道ではない。何処にでもある道路だ。そこへ飛び出すように東が出たのなら……そこに車という物体が現れるのは当然の結末だった。

……うそ。

嫌に早くなつた思考がどうしようもない未来をはじき出す。

そんななかでも束は千冬に手を伸ばす。彼女は気がついてすらなくて、後ろ姿しか見えなかった。

それでも伸ばした。

けれど、届かない。

その伸ばした手の平は千冬に届かず、必死に追いかける少女に届いたものは

「束ちゃん!!」

キキーツと引き裂くような音に続いてゴンツと鈍い音が聞こえた。

「……………え……………」

呆然と束が呟いた。

……………おかしい。私は轢かれるはずだった。

冷静な思考が動きを続ける。

……あの速度、タイミング。どれを見ても私がこうして尻もちを付いているだけなのはおかしい。

呆然と手を掲げて見た。傷はなく、綺麗な手だった。

……どうして？

視線をそっと上げた。そこには前方が大きくへこんだ車だけがあった。

自分は無傷なのに、どうして車は壊れているんだろう。

束は本当に何も分からなかった。

腰が抜けていた。あまりにも突然のことに力が入らない。束はどうにかして立ち上がろうと手を地面につこうとして、何かに触れたのに気がついた。

「……？」

それは柔らかかった。

「あっ……」

それは束の足元にあった。

「……うそ、うそだよ」

それは束を押しつけた後のように転がっていた。

「……うそだよ。うそにきまつてるよ……ね」

束の狭まった視界がどんどんその根基へと走っていく。

徐々にはつきりしていくそれ。

それはもう冷たくて……そう、束の身近なものに似ていた。最近は何日見てた。少し前には両手で握ったこともある。

「………うう、うそだよお………」

ぽつり、ぽつりと雫がおちた。

なんだろう。束は濡れた目元をぬぐう。

どんどん溢れてくるそれをつつとおしいとばかりにグイグイとこすってもまだ溢れてくる。

その雫は幸か不幸か、狭まった束の視界を元に戻してしまった。

広がった視界で、みる。

「……お、にいちゃん………」

うつぶせでぴくりとも動かない彼の姿を。

「……おきてよ、おきてってば」

彼の肩をゆすつた。

伸ばされた手を握って、何度も声をかけた。

それでも彼は動かない。

「返事して、じゃないと……明日は課題たくさん出しちゃうんだから。だから」

最後は小さすぎて、束にも聞こえなかった。

尻つぼみになる言葉と滲む視界。

束は何度も何度も声をかけて、ゆすつて彼を起こそうとする。でも、起きない。

……傷もない。血も出てない。なのに起きない。

束はわかっていた。でもわかりたくなかった。

声をかけるのは、肩をゆするの、知りたくなかったからだ。逃げたかったからだ。現実から。

でも、それは束の逃げる速度よりもずっと早くて、追いつかれる。

束は気がついてしまう。

ぎゅっと握りしめた手。束の近くにあっけいも温かった手。そこから伝わる脈がないことを。

第七話

白い煙がもくもくと空へと上がっていった。からつとした夏らしい青い空へと上がる煙は遠くまでいってもよく見える。束は黒い服装に身を包みながら一つの星もない昼の空をじっと見つめていた。

「おにいさん……」

唇から洩れた呼ぶ声を受け取るべき人は、もういない。すでに目の前の墓石の下で眠っている。束は別に死後の世界なんて信じてないが、彼がここにいないことだけはしっかりと分かった。

……もう会えない。

どんなに望んだって、彼は戻ってこない。

彼は四日前のあの日、死んでしまった。

周りを見ていなかった束を追いかけて、車にひかれそうになった彼女を助けるために彼はその身を犠牲にした。即死だった。吹き飛ばされた時に強く頭を撃ったことが原因らしい。法定速度を守っていたとしても、うちどころが悪ければ人は死ぬ。彼もそうだった。別に外傷なんてなかったが、彼は絶対に怪我をしてはいけない頭の中をどうしようもないほどにやってしまった。実に1.5tもの鉄の塊が40kmもの速度で軟弱な人の体に襲いかかればどうなるかな

んで、誰にでもわかる。そういう意味では……外傷のなかった彼はある意味幸運だったのか。

コインを投げれば裏か表が出るように、彼もまた生きるか死ぬかは二分の一。人は簡単に死ぬのだ。

「……………」

束は黙ってお墓の前で空を見ていた。

空に星はない。

ぼんやりした頭の中で、人は死ねば星になるってホントかな。そう問いかける自分がいたことに気がつく。遠くで……彼の妹だろうか、彼にどこか似た顔立ちの少女が泣いている声が聞こえる。まだ兄が死んだことを納得してないのが、束にもよくわかった。自分はすぐに納得してしまったのにああして感情を吐き出す彼女を見ると自分がどこかおかしいような気がしてくる。

暑い日差しに照りつけられた黒い石。それは彼じゃなくて、ただの石だ。彼はもう立ち上がらない。

……奇跡なんて起こらなかった。そこにはただ現実が堂々と居座っているだけだ。

「束……………」

となりにいた千冬が小さく親友の名を呼んだ。その声は彼女を知るものなら驚くような、とても弱々しい声だった。彼女の目の下にはクマがあり、顔は何処となく弱々しい印象が彼女をとってかわつ

ていた。まるで何かに取りつかれたような顔だった。

東は、どうしても思わず、ただ彼女に大丈夫だよ、と言返した。千冬とは対照的なまでにいつもと変わらない声。自分の所為でという誰にも攻められない地獄の中で千冬は、ただいつも通りでいる東が恐ろしく、同時にどうしても叫び出したい衝動が彼女を満たす。

運命の齒車はもう取り返しをつかないところまで来た。

その俯いた視線の中で千冬はみた。綺麗に手入れを欠かされていなかった東の指先。自慢なんだとひっそりと言った彼女のいつかの表情が脳裏に映る。それが見る影もないくらいにぼろぼろになっていた。よく見れば爪は割れ血が固まった跡があった。それが何を意味するのか、千冬には分からなかった。ただ、どうしようもない悪寒だけが体に溢れて、止まらない。何を意味することもない、何かに聞かせるわけでもない、純粹に千冬の唇から声が、もれた。

「東……？」

ただ呼んだだけだ。そこに意味などない。しかし彼女はゆっくりと振り返った。その視界のなかで千冬は見る。目の前で大切な人を失った彼女は、自分のせいで大切なものを失った彼女は小さく笑っていて、同時に泣いていた。

「ねえ、ちーちゃん。私、どうしても信じられないんだ」

束が千冬の瞳を見つめながらいった。

「……そう、なのか。でも、もうあの人は……その……」

「ううん。そっちじゃないよ」

……そっちじゃない？

それ以外に信じられないことがあるのか。束は千冬の驚愕を気にすることもなく語る。

「お兄さんの心臓が止まったのはわかってるし、酸素の供給が止まった脳の細胞が壊死してもう生き変えられないのもわかってる。私が言いたいのはそうじゃないよ」

ゆっくりと、しっかりとした声だった。現実を見据え、目の前の事実へと挑む挑戦者の目つきだった。

「私が信じられないのは、私に作れないものがあつたこと」

「作れないもの？」

「そう。私ね、帰ってから考えたんだ。どうしたら　時間を戻すことができるかなって」

何を言ってるんだろう。本気で千冬はそう思った。そして気づく。

ああ、そっか。束、ほんとはまだ……

なんで手が荒れていたのか。それは束が今まで机にかじりついて考えていたからだろう。

「でもね、駄目だった。私がどんなに考えてもできなかった。今まで私にできなかったことなんてないのに。どうしてだろうね。私が本当に必要な時に、頭は役に立ってくれないんだよ」

嫌だ、嫌だ、嫌だ。束の瞳が爛々と光っていた。どんな手段でもいい。もう一度、会うんだとその瞳が語っていた。

「束……あの人は、もう」

千冬は自分に彼が死んだ責任の一端があることを理解したうえで束を諭そうとした。千冬の瞳に涙があふれる。

私があんな意地悪を束にしなければ。あんな子供のように癪癪を起さなければ。今も束は笑っていたはずなのに。あの人は生きていたはずなのに。

震える体を叱咤して千冬は束と向き合った。束が死んだ人間に固執する。……それは束を笑わせていた彼も望まない選択肢だと思っただけだ。しかしそれに束は首を横に振るだけだった。

「笑っちゃうよね」

唐突に、何の脈絡もなく束が呟いた。その乾いた音は千冬にだけ聞こえた。

「私、お兄さんの名前も知らなかったんだ。あんなに一緒にいたのに」

目の前で存在を主張し続ける墓石に刻まれた名に、東は見覚えがない。彼女にとってお兄さんはこんな名前の誰かではなかった。

「ほんと……笑っちゃうよね」

本当に笑うしかないよね。あんなに一緒にいたのに。東は今も彼とかわした会話を覚えてる。何千と彼から送られた言葉、その中に彼の名前だけは無かった。

「私、たくさんお兄さんに勉強を教えたよ。でもお兄さんは名前を覚えてくれなかった。どうして、だろうね。私にはわかんないよ」

溢れる涙を、自然と東はぬぐっていた。それでもどんどん溢れる涙。

「お兄さん、すっごく優しくかった。ほんとのお兄さんみたいだった」

今までずっと、それこそ葬式が終わってからずっと黙っていたのに、東の口はどんどんうごきはじめた。一度決壊した涙と共に、脳裏に彼の姿が浮かんでは消える。

「私が教えても、すっごく楽しそうにしてくれた。変な目でなんか見なかった」

さすが東ちゃん。わかりやすいね！

「……楽しかった。お兄さんと喋ってるだけで、楽しかった……っ！」

溢れた涙が熱い。燃えるような感情の炎が束の中で揺れている。

束もまた、気がついた。

溢れる涙の意味に。その理由に。

「……………だよ……………」

余計に、涙があふれる。

「……………いやだよ……………」

もう会えない。

もう話せない。

それは変わらない事実で。どうしようもない現実だった。

「会いたいよ……………まだ、まだ沢山話したいこと、あるんだから……………」

もう、立つてられない。

束は膝を地面についた。未だ溢れる涙がぼたぼたと落ちる。

「なのに……………なんで……………なんで……………なんで……………!!」

がんと地面をたたいた。石の破片が刺さって血が溢れた。それでももう一度叩いた。

「約束！ 約束したのにッ！ 宇宙からお礼をいうって。私がそれを聞くて！ 約束したのに どうして！」

涙に歪む瞳のまま何度も地面をたたく。気がつけば鮮血が待っていた。

「……………もう、もうやめろ！」

見てられない。自分が束をこうして苦しめてる。そんな訳がないのに、千冬には束が攻めてるような気がした。だから精一杯の声をあげながら束を抑えた。

「もうあの人は死んだんだ！ 死んだ人は約束を守れない！ 束ならわかるだろうっ！」

束を抑える千冬の目にも涙があふれていた。

「違うよ！ お兄さんは約束破らないよ！ だって一度も破らなかつたし うそはいけないうって言ってたもん！」

「束！ いい加減にしろ！…………あの人は死んだんだ！ もう納得しろ！」

「嫌だっ！ お兄さんはちゃんと約束守ってくれるもん！ だって！ だって！！ じゃないと」

振り下ろした腕が力なく地面をたたいた。

「じゃないと お兄さん、うそつきになっちゃうよ。…………うそはいけないうって、いってたもん」

ぼろぼろと溢れた涙の所為で、まともに喋れなかった。かすかな
嗚咽のみがふたりの間で響いた。

「あ、ああ、あああああああああああああつっ！！」

声を上げる。これ以上ないくらいに。束は思いつきり声をあげて
泣いた。どうして、どうして。子供のように純粹な悲しみと思いが
束の胸のなかで今もくすぶっている。それが辛くて悲しくて束は声
を張り上げた。

「…………ごめ、…………ごめんなさい…………っ！」

千冬も今は会えない彼に言葉を。締め付けるような辛さと真っ向
から向き合って、辛い痛み能耐えながら何度も何度も同じ言葉を言
った。力なく叫ぶ束を抱きしめて二人は泣く。

「ああああ！ やだあああああ！ お兄さん！ お兄さん！ わた
し…………わたし…………！」

小さい束の体を千冬はぎゅっと抱きしめた。束が壊れるくらいに。
そうしなければ束はどこかへ行ってしまうそうだった。

ひつく、ひつくとしやつくりを何度も束はあげる。涙は止まらず
ぼろぼろと流れていた。それでも時間というやつはずっと進む。し
ばらくすると束は体を震わせて空を仰ぎ見た。

「約束は絶対を守るんだ…………」

その視線の先には小さな星が一つ、瞬いていた。本当に小さな光

が青空のなかにポツンと光っていた。

「私は約束を破らないよ……」

絶対にやぶらない。束は決めた。

「いつか、私は宇宙にいくよ。そしたら、お兄さんもほめてくれるよね」

宇宙に行つて地球を眺めたらさ、その時ももう一回言つから。

彼がそういつたから、束は約束を守る。ただ彼の声が聞きたくて約束を守ると決めた。お兄さんが宇宙にいけないなら、私がいく。

「だから……だから……っ！ 私は絶対宇宙に行くんだ……っ！
絶対に、絶対にっ！」

そうして彼女の物語が終わつて、彼女の物語が 始まる

それから東は人が変わったようにすべてをあるものの発明に捧げていく。今までどんなことがあっても隠し続けた『天才性』を惜しみもなく使い続ける。いくつかの発明をして世界中から発明費を稼ぎあげ、自分だけの研究施設を作り上げて、東はある発明品　後のISを作り始める。自分の生活、家族の生活、世界のバランス、そういったすべてのものに興味の一つも持たずに彼女は発明を続けた。

その研究のペースは他人から見ればおかしすぎるものだった。世界中が彼女の発明に狂喜し彼女をもちあげたが、それにすら一片の興味を示さなかった。そんな東の姿に親友　千冬だけはすべてを悟った。

もう彼以外が東の目に入っていないんだ、と。

彼女がかろうじて認識できたのは親友の千冬とその弟、そして家族くらいのものであった。それを知った千冬はいつまでも罪悪感から逃げられなかった理由と、振りかかった逃げられない罰を悟る。

……私は、きつと東のそばにいないくちやいけないんだ。お兄さんを殺して、その罰がきつとこれなんだ。私が東を壊したんだ。なら、

私は

そうして千冬は彼女と共にあり続けることを決めた。それがたとえどんな結果をもたらそうとも、自分だけは束と一生付き合っていくのだと、そう覚悟を決めた。

……みて、ちーちゃん。どう？

千冬すら気がつかぬまに束はウサギの耳を模した力チューシャをつけていた。それは彼女が以前彼に束らしいとウサギの小物を褒められたからだと言っていた。宇宙からの彼の声を聞くために大きな耳が必要なのだとも。

……ね、できたよ。

時間がたち、彼女の作ったそれ　ISを見て千冬はただ誰にも見られないように泣いた。何も知らない人が見ればただその技術に圧倒されるだけだろうが、千冬だけは彼が束に望んでいた平穏を犠牲にして生まれたISを見ることが辛かったのだ。

IS　その機能の数々に、束の優しさと彼への思いが詰まっている。束が渡せなかった絶対防御、それは彼がもしISに乗った時怪我をしないように。人型で訓練をせずとも飛べて宇宙に上げれる機能、それは体を鍛えるのが苦手な彼のために。使用するためのテキストは日本語とわざわざ翻訳した英語が同時に乗っている、彼が英語は苦手だといっていたから。

束が作り出したISは、彼女が宇宙に行って約束を果たすためのもので、同時に彼の願いを叶えるためのものだった。

しかし 束は一人で宇宙へといった後、結局ISを宇宙用として世界にださなかった。

千冬はなんとなくだがその理由が分かった。多分、束は自分の作ったISで宇宙を目指してほしくないんだろうと。ISで宇宙に行つていいのは彼だけなんだと。束はそう思っているような気がしていた。

なんだか、つまんないね。

束の提案したミサイルの爆撃をISで防ぐことで軍事的価値を見せつけISで宇宙を目指させない計画に千冬は何も言わずに協力した。それはそこにかつての誓いがあつたからだ。千冬の目の前にいる少女は、親友で、同時に逃げられない罰の形なのだから。

束という一人の天才は、何の理由もなく世界を動かし続け、翻弄し混乱を世界に与え続けた。

もう、彼女にはそれくらいしかすることがなかったから。

そんな彼女の私室には……………今も英語で書かれた宇宙への本が大切そうに保管してあつた。

完

第七話（後書き）

ぼつねた

何をとち狂ったのか、死ぬのはやり過ぎだろうと思って、一度主人公が痴漢の冤罪で五年の懲役を着せられて、それから助けるためにISを束が作るというストーリーを書いていた俺がいた。

実に20000文字もの超大作。これはこれでアリなんじゃないかと思う今日この頃。……なにやってんだろ、俺。

みたい人は感想へ、「もっとも簡単に男性を社会的に抹殺する方法は」の「」を埋める回答（字数制限なし）を書いてくださあq wセd r f t g yふじこ1 p。

感想のほうに要望が多数上がれば生存IFを書こうかなと思ってる。

*その場合IS学園で束が教師をしている可能性が高いなあ。

生存IF 一話（前書き）

あくまでIFの物語。本編へは全くつながりません。

お兄さんが死んでしまつて悲しいが、あれがこの小説の結末なんだと思う人は見ない方がいいかと。

では、もしもお兄さんが生きていたら……をお送りいたしましょう。

生存IF 一話

「ね、お兄ちゃん。実は今日、渡したい物があるんだ」

「ん？ 束ちゃんが俺に？ いつものお世話になってるのに、なんだかちよつと申し訳ないな」

「ううん、そんなわけないよ。わたしとっても楽しいもん。ね、だからこれ、受け取ってください！」

――――

北海道に作られたある施設。その渡り廊下を楽しそうに鼻歌とともに歩く女性がいた。彼女の名前は篠ノ之束。抜群のプロポーシヨンを見せつける様にして歩く彼女だが、周りから沢山の視線を集めていた。がそれは決して負の視線ではなかった。むしろ尊敬や憧れの視線を多分に含んだ熱い視線だった。

「あ、束先生だ。こんにちはー！」

そのうちの何人かは束に実に親しそうに話しかける。束もそんな

反応が満更でもないようで、はにかみながらも大きく手を振った。

「あれ、今日はお兄さんはお休みですか？」

「ちょっと用があつてね。そういえば、昨日知り合いの教授に聞いたけど規定単位がもうすぐ取れそうなんだって？」

「そうなんですよ。流石にもう五年もいますからね。そろそろ卒業したいですから」

「そっか寂しくなるね」

「でも私、いろいろ顔が効きますからもしかしたら教授の手伝いで残ってるかもしれませんよ？」

「ふーん。それってつまり私に認められる自信があるってこと？」

「一応言っておくけど、ここの雇い主は私だからね」

「とりあえずは、狙ってますとだけ」

束に話しかける少女はアメリカからわざわざ留学して来たとても優秀な学生だが、それでもここに残れるかは怪しい。そんなこの場所　IS学園は今日も束を中心に、今日も研究と学びを続けていた。

ここ、IS学園が出来上がってからすでに八年の年月が経った。
今では学園都市のような様子をもっているここは北海道の広大な大地をもつて作られていた。

少し話は昔へと戻る。

結局束はこの世界でもISを作り上げた。それは純粹にただ一人の男のために作り上げたということと、戦闘用へのアピールをしなかったことくらいしか違いはないが、束は作ったのだ。ISという機械を。

なにが理由だったのか。それは純粹に彼のためだった。彼は当時ちよつとした事件で怪我をして左手の神経がおかしくなってしまう、後遺症としてはそこまで重くないものの彼の夢であった宇宙への夢は閉ざされる。それに束は猛反発。既存の技術で行けないのなら、自分が作って見せると息巻いてISを開発。彼の誕生日にプレゼントまでして見せた。とはいえ彼女すらも予測しなかった男性が乗れないという欠陥のせいで余計に彼を怒らせて、と一悶着あるのだがそこは詳しく語らない。

ともかく、いろいろと二人の間で起こった出来事（直接的に言ってしまうと彼と彼女の喧嘩だった）がおさまった後に彼がこの発明を世に出さないのはもったいないの一言で束は世界にISを発表した。もちろん彼女の天才性も一緒にだ。

しかしこの時の彼女はすでに彼という存在を手に入れていたので、世の中に恐れられることの一切が怖くもなっともなかった。その辺りに彼女の本性が見え隠れしてなくもない。

発表されたISだが、なぜか原作とは違い非常に世界に注目される。あれだけのものが放っておかれるなんてことはやはりないのだ。これはもう無理かと悟った束はこれを契機にと、今までに溜め込んでいた発明の数々を発表し続ける。毎週のように発表される技術革新によってしばらくは一年は束の姿をニュースで見ない日はなかった。

それもそのはず、発表したものがものだったからだ。1ナノの抵抗による電力の拡大や廃棄処分するしかなかった石油製品のゴミのリサイクル、はてはISを使用した宇宙開発による資源問題の解決など。ノーベル賞を総なめにしたのは言うまでもない。

あまりにも突き抜けすぎて束を確保しようと動き出した輩がいたのも予想の範囲内というべきだろう。もちろん彼女の捕まえることは波打ち際の彼にしかできないため、訓練されたエージェントの方々は束に辿り着けずらしなかった。ちなみに大半はご存じ親友の千冬によって撃破されたことも追記しておこう。

果てには束が作ったものによって損害を受けたと、おいおいと言いたくなる様ないちやもんをつけて束を引き込もうとする国まで登場する始末。結果的に束のためにサミットまで開かれてしまった。

その場で決まったのは全部で三つ。

1、束は人類の共有財産とし、束が作り上げた技術は独占をする

ことをしない。

2、束の国籍を自由国籍とし、束が本人の要望から日本の土地に学校を作ることによってすべての国が協力すること。

3、束はすべての国に対してなんらかの特別な接触をすることを禁止する。

大まかにいってこれだけである。

簡単に言って束を独占しないで仲良く使いましょう。ということだ。もちろん束はただで使われる気なんてさらさらなく、束の目的であった学校を作ることによって各国の協力を得ることに成功するのだが。

そうして作られたのがIS学園である。束本人が校長を務める巨大なマンモス大学である。

IS学園には当初の反応と違い、世界中から科学へとロマンを求める人間や束の発明の数々に惚れた人間が集まってとんでもない人数が集まってしまう。そこにはとても優秀な人物が集まって来ていた。

束はこれ見よがしに各国へとお願いをして、ここに学園としての一面を持ちながら科学者たちの街としての一面を併せ持つ街を作り上げてしまう。わずか二年で北海道の一部に18km四方の世界でも一番優れた街を出来上がってしまうのだから束の影響力は恐ろしい。

もちろん学生へのフォローも忘れない。束は自分が好きだからという理由で研究と同じくらい学生の教育にも力をいれているのだ。優れた人間に教鞭を取らせて、さらには生徒たちが努力をしなければとても進級すらできないような大学を作り上げた。いまや、世界

でも一番優れた卒業するのが難しい理系の大学である。

一応校長である束だが、彼女が教えている教科は何かというと、宇宙関係のものと、機械の発明における着眼点、気になる異性の落とし方、ISに使われているエネルギーについて、人工AIの開発とその応用、などなど多岐に渡っている。

どうやら今日の授業は気になる異性の落とし方のような。束は女性のみが入れる教室に気分良く入っていく。この授業は毎年非常にためになると人気で受ける生徒は抽選で選ばれるほどだった。

「じゃ今日は最後の授業の一回前だね。とりあえずは復習で過去に偉人たちの女性からの口説き方について復習しようか」

束はすぐに全員の携帯にプリントを送信していく。

「ええー、大丈夫ですよ。みんな復習してるから、今更先生に復習してもらわなくても自分でできますよ。それよりも先生のためになる話は聞きたいです!!」

束が用意したプリントを一瞥するだけで興味を失ったのか束の話をせがむ生徒。彼女は至って真面目で本当に復習を済ませているのだろ。束はどうしようかと思っていると、みんなが期待したい目で見ていることに気がついた。

「はあ、仕方ないなあ。今日だけ特別だよ?」

束がため息を一つ落としながらしょうがないというと、まわりの少女たちは歓声をあげた。

「やったぁー！ 束先生とお兄さんのなれそめだって！」

「実はずっと聞いてみたかったんだ！」

「やっぱりすごい出会いだったのかなぁ！」

「束先生を落としたんだからお兄さんもきつとすごいことやってるんだろぅなぁ」

少女たちは好き勝手に予想をしていくが、束はあきれたように笑う。

「ふふん、違うんだなぁ。むしろ私が積極的に捕まえにいったんだよ」

「ええー、束先生がですか！？」

「意外です」

束はそつと窓の外を見る。そして、小さくつぶやいた。

「そつか。もう……八年たったんだね」

「あれはもう八年前のことだね。もうすごく気温の変化の激しい夏だったと思う。暑かったり、寒かったり、大雨が降ったり。すごくせわしない夏だったよ。そんな夏のある日に、私はお兄さんとおったんだ」

「どんな出会だったんですか？」

「やっぱり謎の企業に狙われていたときですか？」

束は少しだけ顔が引きつった。

「別に、道ばたで出会い頭にぶつかったただだよ」

いたって事実なのだが、テンションのあがってる彼女たちには少し物足りないらしい。

「ええ、うつそだあ。ほんとのこと教えてくださいよ」

髪の毛の長い少女が眉をひそめる。どうやらもつと夢のある話を聞きたいようだ。とはいえ、束としては本当のことなのに何で怒られない

ければいけないのだろうと困る。

「本当だよ。まあ、信じないのならいいけど」

東は不機嫌そうに顔を背けた。

「わわ、信じてますって！」

急いでご機嫌取りに走る生徒たち。目がもつと続きを、といっている。

「じゃあ、もうちょっとだけ。私たちがあつてからのことだけど、普通に私がお兄さんに勉強を教えることになったただだよ」

「東先生が勉強を？」

「そ、今君たちがやってるのよりももっと簡単なことをね。私がお兄さんに教えてたんだよ。私が学校を開いたのはそのときに教えるのって面白いなあ、って思ったからだし」

「へえ、この世界最高の学園、IS学園の原点はそんなところにあつたんですか」

みんなが感慨深そうにうなずくのをみて東は心の中で笑った。別にそんなたいしたものでもないのに、と。

今や世界最高の学園と名高いIS学園はやっていることは多岐にわたっている。世界中の技術者を集めに集めたおかげで、道が広がりすぎてしまったのだ。そんなIS学園にもしも彼が入学したとしたら、卒業は……できるか怪しいところだ。この学園では本来三年

で卒業できるはずなのだが、今まで五年以内に卒業したものがないといえば、どれだけ難しいことなのかわかってくれるだろう。

「その辺の話はまた今度ね？　ともかくしばらくは私がいろいろと教えてあげてただけど……」

「……いろいろ、失礼、鼻血が」

一人なぜか鼻血を吹いたが気にしない方向でいく。

「……教えてただけど！　ちよつとした事故があつてね。お兄さんがけがをしちゃうんだ」

「あ、あれですか？」

「そうあのお兄さんの左手の怪我だね。あれは私をかばって事故にあつたときにした怪我なんだよ」

今でも思うときがある。あのとき自分がお兄さんに絶対防御の試作品を渡していなかったら……と。あの日、渡した制御球は彼が束をかばったときに確かに発動し守ることに成功する。とはいえ、一日で作った試作品。彼の体すべてを守ることはできなかった。命そのものを守ることはできたが、彼の左手までも守ることはできなかった。事故で彼の左腕は折れ、折れた骨が神経を傷つけて彼の左腕は動かなくなってしまったのだ。

「へえ、先生やつぱりドラマチックなことあつたんじゃないですか」

「あのね。本人にそれを言うの？　実際に目の前でかばわれて引かれてみる？　血の気がなくなるよ」

さすがの束の額に青筋が浮かんだ。すぐさま少女が土下座ばりに額を下げて謝った。ならよし。

「先生！　そ、そのあとはどうなったんですか？」

「あ、ごめんね。……そのあと？　ああ、事故のあとか。その後はね、私が謝りにいくんだけど、お兄さんは何も気にしてなくてね。……夢だった宇宙にいけなくなったのに、たいしたことじゃない風に振る舞ってたんだよ。多分医者にいつて口止めをしたたつもりなんだろうけど、どうしてもお兄さんの体の調子が知りたかった私はハッキングしてカルテをのぞいてみてたからね、お兄さんの手が動かないのは知ってたんだ」

「それで……？」

「みんなもそこからは知ってるでしょう？　私はISを作ることを決めた。左手の動かなくなったお兄さんが宇宙に行けるように。……普通なら左手の動かない宇宙飛行士はいない。だからいけないはずだった。でも私はそんなこと認められなかった。それでISを作ったんだよ」

「お、お兄さんのためにですか？」

「そうだよ。世界最高の芸術的発明の第一歩なんて言われてるけど、最初の動機はそんなんだよ」

「束先生の最初の発表作品が……まさかそんなあ。ただの色恋から生まれたなんて……」

ショック、と一人の女の子が机に突っ伏す。芸術品にも例えられるISにきつといいイメージみたいなのを持っていたのだろう。もしかしたら白騎士にあこがれてもあつたのかもしれない。束はあとでちーちゃんにフォローしてもらおうと心にメモを残しておいた。

「まあまあ。発明した理由はどうでもいいでしょ？ で、その後なんだけど、私はしばらくISを作りながらお兄さんの家に通うことにしたんだ」

「通い妻ですね。わかります」

「どこでそんな知識を覚えてくるのか束先生に教えてくれる？」

黒人の女性がうんうんとうなずくのちよつとしたカルチャーショックを覚える。

「いまやオタクとタバネとコミケは世界共通語ですよ。知らなかったんですか？」

「むしろそこに私をいれるなと声を大にして叫びたい」

ふっ、と彼女は笑った。何をいまさら。そう目がいつていた。

「あれ、私生徒になめられてる？」

「まあまあ先生、続きを教えてくださいよ」

あ、うん。そう束が首をひねりながらいった。

「えっと、私が通い妻を始めてからしばらくはお義母さんに料理を

教わるって名目で通ってお兄さんの味覚を確保しながら、さりげなく家族になつていつて。えっとその後は何したんだっけ。あ、そうだ。お兄さんに意識されないように距離を置いたんだ」

「え、距離を置いたんですか？」

「うん。あのときはそのままいったら妹として扱われそうだったからね。しばらく距離をあけて、ちよつと心のガードが緩んだときに一気に近づいて女として意識させたんだよ」

なるほど。少女たちはさりげなく手元にあつたメモ帳にメモをする。彼がいった何気ない一言を覚えておくためにメモをする習慣を束がつけさせたその成果だった。しかしぱつと見メモをしているようには見えない。それもそのはず、メモされていると男に意識されないようにさりげなさを特訓してきたので、そうとは思えないのだ。なんという女の周到性。

「どうやって意識させたんですか？」

「お兄さんが疲れててぼーっとしてるときにお酒を軽く混ぜたケーキを食べさせて酔わせた」

「……それってなんというか、毒みたいに使ってません？」

「東先生。今までの授業は結構冗談とか入ってるのかと思ってましたけど、まさかほんとにやったことあるんですね」

ちなみに今までの授業では、過去の偉人たちが男を落とすためにしたことをいくつか実例にあげて知識を授けただけだ。……過去のことに侮る事なかれ。將軍のように絶大な権力を手に入れるために

過去の女性たちは外道とも言えるあの手この手を使って男を魅了していったのだ。現代の魔性の女ってレベルじゃねーぞ。権力のためなら手段を選ばずがモットーなのは冗談でも何でもない。

「それでその後、お兄さんに彼女ができないように常に周りのことをリサーチして、近づいてくる人がいたらほかの人と出会いを作ったりしてどけて……まあいろいろやって、最終的にお兄さんに私を襲わせて」

「あ、意外です。東先生が襲うと思ってたんですけど」

「だってお兄さんに襲わせたほうが後々便利でしょ？」

「……今、私は東先生の本性をみた気がする」

今更だ。東は一人ひっそりと笑う。実際にはもっといろいろなやつてる。口では言えないようなあれやこれ。お兄さんには絶対に言えない。

「そのあと、お兄さんがいろいろ発表してみればどうだっているから発表して……まあ後はみんなが知ってる通りだと思うよ」

「世界を変えた発明の数々はお兄さんがいなければ発表されなかった……っ！」

「衝撃の事実ね」

「別に隠したつもりはないけど。というか毎年話してるから、私の生徒はみんな知ってるよ」

束はため息を吐きながら思う。毎年のせられて話してるけど、これ、結構羞恥プレイだよねと。

「はい、じゃあ今日はこれで終わり。かいさーん！」

「ええっ！？ まだ早いですよ！」

「もう決めたの！ 私は帰るから」

そっとうや否や束は教室を出て家へと向かった。しかしその足の方は学園の中心を向いていた。それもそのはず、彼女の家は学園の中心にある。この学園は束のわがままから始まったので文字通り束が中心に作られているのだ。

「くく」

束は上機嫌に鼻歌を歌いながら歩く。さっきまでの話でいろいろと思い出していた。今は落ち着いた気持ちで心を占めているが、それでも少女時代に秘めていた温かい気持ちはなくならない。ふとした拍子にいつだって心を暖かくしてくれるのだ。

「今日の晩ご飯はなにかなあ。お兄さんはなにしてるかなあ」

束は今、間違いなく幸せだ。だって自分を隠すこともなく周りに受け入れられて好きなことをできて、なにより彼がいつもそばにいる。自分の家に帰れば彼に会えるのだ。自分の一番近くにいて支えてくれるのだ。幸せでないはずがない。

「あの子ももう帰ってるかなあ」

それだけじゃない。あの家には自分たちの最高の宝物だっているのだ。

早く帰って二人の笑顔がみたいな。束はいつもそう思ってる。しかし束にも立場があって、今の平穏な環境を保つためには自分という存在が不可欠だとわかってからさばらないし逃げない。

いつもの帰り道。いくつかの道を歩き挨拶をしつつ最後の曲がり角を曲がると一気に視界が開けた。学園の中心。そこは束たちだけが入ることに許された領域がある。それなりに広い庭の中心に和風の家が建っている。それが束の家で、帰る場所だ。束はにっこりと笑うと胸ポケットから鍵を出し、そつと鍵を開ける。

もちろん最初の一言は決まっているだろう？

束はいつものように、満面の笑みと幸せいっぱいの胸を押さえて言う。

だって、そうするのが????

「ただいま―――！」

?????家族つてものでしょ？

生存IF 一話（後書き）

お兄さんが全く出てこない罫。

東とお兄さんのラブラブかと思っただかい？

だが断る！ 私の最も好きなことはみんなが予想していたことを微妙に変な方向に裏切ることだからだ！

なんて言うのは冗談です。

生存IFは二話目が本番だと思ってください。今回は前振りつてやつです。もし彼が生きていた場合の束の周りの環境つてやつを説明するのが長くなりそうだったので二つに分けました。そのへんはお許しを。

ちなみに千冬はこの世界でもISに乗っちゃってます。束に雇われる形で世界中を回ってISの使い方を教えたりしてます。

みなさん。たくさんのかんそうありがとうございます。すごくうれしかったです。

これから（多分後一話か二話）もよろしく願います。

生存IF 二話

そうして時はすぎ、今は群雄割拠の時代。ISたちによる代理戦争と荒廃した大地。人は宇宙へと目を向けていった。しかしその計画へ旅団ORMCが立ちふさがる……っ！

「っっていう未来はどう?。」

「あほか」

いつものように束の話すともない未来へのビジョンを彼は鼻で笑って聞き流した。内心では束がやろうと思えばできなくないことを知っていて冷や汗だらだらなのだが、目の前で残念そうに肩を落とす束は知らない。

「だいたいあの子はそんな世界で生きていけると思えないんだが」

「あの子？ もちろん最高のISをプレゼントして霸王として君臨させるに決まってるよ」

束の技術力は馬鹿にならない。一度はあきらめた夢を気に食わないという理由だけで叶えさせられたことのある彼は知っている。束が本気で目指した領域へと届かないものなんて数えるくらいしかないってことを。

かつて自分は冗談半分に束に聞いたことがある。束にできないことってあるのか？と。そのとき束は実に苦々しい顔をしながらいった。

「????私にできないこと？ そうだね多分、時間と男をISに乗せることくらいだと思うよ。」

事実束は今まで思いついたことのすべてを作ってきた。……とはいえ荒廃した大地なんて作ってほしくはない。

「……む、いいじゃん。そっちの方が夢があつて。あ、それともデシジョンがいつもヒヤッハーであべしつな世界の方がいいかな？
ね、ね!？」

「どつちも却下だっ！」

「ええ、じゃあどんなのならしいの？」

「そりゃあ、あれだ。黒い球体に集められた人たちが宇宙人たちと戦うとか？」

「むむ、なかなか難しいオーダーだね。宇宙人が用意できるかわからないけど、あの武器なら楽勝でできるから……うん、やってみるよ！」

「いやいや、あれやったら誘拐だろう」

「あ、そつか。じゃあどうしょ」

「個人的には優しい世界の方がいいんだけど」

「優しい世界？ 心臓麻痺が犯罪者にたくさんおこる世界？」

「それは優しくないぞ」

「わかった！ 三分間のヒーローが活躍する世界だね！」

「暴れたときの被害を考えような。そもそも怪獣がきた時点で危ない世界だよ」

「危ない？ どんなのならやさしいんだよ。束さんはそろそろわからなくなってきたよ」

「そうだな。優しいってイメージで言えば、俺は夕暮れの学校とか

かな。なんだかんだで学校から帰るときって優しい気持ちになれたし」

「ほほう。学校の日々ですね。直訳すると??」

「はい、ストップウツ!! 最終的な落ちが俺には読めたから! 言わなくてもわかるから!」

「ちえ、それなら……っってもう時間だ。今日はもういくね?」

「あいよ。……どうしたんだよ、いきなり俺の顔じつと見て」

「ほら、しばらく顔見れないから」

「へいへい。ならどうぞ」

そういつて彼は顔を近づけた。

すると束はそつと目をつぶった。

「……………んっ」

「いつてきまーす!」

「いつてきます」

二人は学園の内部にある家からそろって出る。今日はあの子が学校なので二人とも職場へと直行する。

「あ、先生。おはようございまーす!」

「おはようございます!」

東は学園で一番有名な教師だ。道行く人たちがみんな挨拶をしてくる。

「お兄さんもおはようございまーす」

もちろんその夫である彼も非常に有名だ。なにせ毎日東といふのだから。東は結構所構わずに抱きついてきたりするので、そっちの方向でも有名なのは彼にとっていいことなのか、悪いことなのか。少なくとも学園の男子のほとんどにモゲロと思われるのは間違いない。

そんな彼は学園でもお兄さんと呼ばれている。

なぜか？

それは彼の本名がお兄さんだからだ。

……ちなみに冗談でもなんでもなく、昔東が初めてお酒を飲み過ぎて酔っぱらったときに彼の言った、俺の名前知ってるか？発言から東が知らないことに気がついて、それならとちよつとノリで国のコンピュータにハッキング。本籍に国籍と彼の名前をお兄さんにかえてしまったのだ。

もちろん普通ならそんなことはしないし、してもすぐに戻すはずだったのだが、東は酔うと記憶をなくすタイプで……気がついたときには東は既に条約にサインしており国にちよつかいも出せず……結局彼の名前はお兄さんに決まってしまったのだ。発覚した次の日、東が一日中ベッドの上から立ち上がれなかったのは秘密だ。

一応改名のチャンスはあったものの、なぜかことごとく偶然の邪魔が入ってできなかったので、今もお兄さんはお兄さんだ。

「先生たち今日もラブラブですね〜」

ちよつど分かれるあたりの場所で一人の生徒がいった。すこしだけ笑っているのはご愛嬌か。

「ふふん、うらやましいでしょ〜。でもね旦那さんはあげないよ！」

「もらいませんよ。だってお兄さんも東先生にゾッコンなんだもん」

「えへへ、そう？」

束は恥ずかしそうに顔を染める。お兄さんは職場の人に毎年のようにからかわれているのでなれた。

「束、俺はさすがにもういくよ?」

「あ、うん。行ってらっしゃい」

軽く頬へキス。彼は元気百倍と言わんばかりに微笑んで職場へと歩いていく。

「なんだか欧米的な夫婦なんですね」

じーっと束を見つめる少女の目が、ここは日本だ自重しろといていた。

「いいじゃん。好きなんだし」

束は軽くスルー。ここの最高責任者でありどの国にも属さないIS学園の大統領のような地位にいる彼女は実に風紀を乱していた。一応学校の先生だろというツツコミはなしである。

彼の仕事は至って単純だ。IS学園の副校長として全体の監査をしている。例えば講義で手を抜いていないか。さぼっていないか。備品はそろっているのか。経費の申請は本当なのか。そういった束が嫌いな雑事を主に担当している。とはいえ、一人だけでできる訳もないのでほかにも何人かいるが、一応彼はそういった役をまとめるまとめ役のようなものだ。しかしこれが忙しい。毎日のように実験があるこのIS学園では経費の申請書だけでもかなりの量になってしまふ。おかげでかなりの時間を使ってしまう。束の開発したコンピュータのおかげで楽にはなっているものの、それでもやはり人間が確認しなくてはいけない部分というのは確かにある。一応給料は束に負けている（そもそもゼロが五個ほど違う）とはいえ、愛する女性の作った場所を守りたいと思うのは普通だろう。こうした雑事の積み重ねが土台をしっかりとしたものであるのだから。

束の内心としては、別に働かないで専業主夫をしてくれてもいいのに……である。彼はわりと頭の柔らかいほうではあるけれど、それでも女の人に養われるのにちよつとした忌避があったらしい。前時代的な考えだとは思うが、がんばって自分で家族を守りたいんだと熱く語られればれた弱みで強く言うこともできない。ぶっちゃけてしまえば束は現在国籍をどこにも持っていないので所属税もなく、孫くらいまでは遊んで暮らしても使い切れないお金がある。

「じゃ、今日はこれで終わり。みんな各自で課題は行っておくように。やらない人は単位とれなくても知らないからね」

コンコンとまとめたプリントをそろえる。目の前の日の光が金髪にうつつてとてもかわいらしい少女が、その笑みをもって束に話しかけてくる。

「あ、先生。そういえば今度第二回^{モンド・グロツン}IS世界大会って誰が勝つと思いますか？」

IS世界大会。それは束の意図しないISの形だった。当時の束はISを戦いに使うということがどうしても許せなくて、いろいろと裏でしたのをよく覚えている。ただ、そのときの騒動で親友を巻き込んでしまったのは今でも失敗だったと思ってる。

「世界大会？　ちーちゃんじゃないかな？」

だってあんなになるとは思わなかったんだもん。確かに束の作ったISに乗ったのは結果的に千冬が最初だ。それでも最高の操縦者になるとは思わなかった。まさかの適正Sをたたき出し、世界中のISに喧嘩を売ってしまうとは思わなかった。あのまま放っておけば世界中からバトルマニアとして指名手配されていたかもしれない。

なにがあれば最強を証明するといって世界中を放浪するようになるのだろうか。まったくもってバトルマニアの思考は予測できない。束が犯罪者をターゲットに移し替えなければ危うく犯罪者だった。そんな経験から今の最強の搭乗者は間違いなく千冬だ。束は確信を持っている。

「即答ですか。私もそう思ってますけど」

「だってちーちゃんだし」

「そうですね。オリムラ先生ですもんね」

二人は仲良くうんうんと頷いた。

「そういえば今はどこにいるのか知ってますか？」

「この前私のところに整備にきたけどその後は知らない。確かネパールのほうで違法研究があるからとつちめてくるって言ってたけど……さすがにもう終わってるだろうし」

整備を頼みたい。そういつて束のところにきたのは一ヶ月前。弟の一夏には三日に一回は連絡を入れているのは知っているが、それでもどこにいるのかはわからない。千冬は対外的に束のガーディアンという立場だが、束のそばに控えたことは ない。むしろ自分から敵を求めにいつてる。

「さ、さすが戦女神。違法研究を暇つぶしのようにつぶしにいくんですね」

「だってちーちゃんだし」

「そうですね。オリムラ先生ですもんね」

あはは、と二人は声を揃えて笑った。そこにほかの生徒が入ってくる。

「でも今年は結構優秀なのが出るんでしょう？ 千冬先生でも怪しいんじゃないんですか？」

「うーん。正直ちーちゃんが負けるところを想像できないんだよね。周りは第二世代になっではいるけど、ちーちゃんの雪片はなあ、世代関係なく防御無視のチートだし……」

「やっぱりオリムラ先生の勝ちですね」

突っ込んできた生徒が肩を落とす。

「どうしたの？ そんなにちーちゃんに負けてほしかったの？」

「いいえ、なんというか、こういうとあれですけどやっぱり大会なら賭けつて必要だと思っんですよ」

「まあ、人の趣向はあれども、楽しむためのエッセンスにはなるね」

「ですよ。でも千冬先生がでちゃうと……はは、もうみんな千冬先生にかけちゃって……掛けにならないんですよ。誰も他の人にかけない。ISに乗らなくても強い人がけがをする訳もなくて……もう商売あがったりですよ」

「それは……残念ということ。ちーちゃんがなくなるまで待とうね」

束が慰めるようにいうと、その後ろから低い声が響いた。

「そうだぞ。それに賭け事は禁止だ。先生の前で話をするなんていい度胸だな」

「「お兄さん！」」

「ずいぶん早かったね」

彼は腕をまわして眠そうにあくびを一つ。それに束はだらしないよ、と声をかけて襟をそろえてあげる。

「今日は少し部下がやってくれるっていうから。ちょっと押し付けてきたよ」

「そっか。後でお礼にケーキでもあげた方がいいかな？」

「そうしてくれると助かるね」

彼は仕事が終わった後の気だるい感覚のままふらふらとたっている。どうにも束の目にはお疲れのように見えた。

「もう。私ももうすぐ終わりにするから、ちょっと待ってて？」

おう、と小さく返事をした彼と二人で教室を離れて束の研究室へと歩いていく。途中で生徒の二人は元気よく家に帰っていった。

少し束は不安だが、今日中にしないといけないことが後、二三ある。それをしないうちに帰ることはできない。すこし駆け足で研究室まで行ってすぐさま書類を片付けていく。彼は束の研究室に入ることはなく、部屋の外に備え付けられた椅子に腰をかけて束を待った。しばらくすると彼に誰かが話しかけた。

「あれ、お兄さん。束先生の部屋の前でどうしたんですか？」

「ん。ちょっと束を待ってるんだよ」

「もしかしてけんかしちゃいました？」

「え、なんでそうなるの？」

「だって部屋の前で待ってるってことは、東先生がすねて部屋にこもっちゃったってことでしょう？」

「ちやうちやう」

部屋の外から彼と仕事の同僚の話し声が聞こえるけれど、少しでも早く仕事を片付けたい東はどんな目の前のことへと集中していく。

「そうですね。東先生とお兄さんが喧嘩なんてないですよ」

「まあ、一般的な夫婦よりも仲がいい自信はある」

「またまた。私知ってますよ？ この前の日曜日、ずいぶんがんばったみたいですね？」

「……なんのことかな？」

「ふふ、私、実は日本の温泉が大好きです。それでたまに東先生なんかを誘っていくんですけど……背中にちょんって赤いマークがありましたよ？」

「……あゝそれは」

「隠さなくても大丈夫です。二人の仲を知らない人は世界中を探してもなかなかいませんから」

「いやそれはいいすぎじゃないかな」

「いえ？ 東先生が世界を変えられる人で、あなたは東先生を変えられる世界でたった一人の人。ね、あなたは間接的とはいえ、世界を変えられる人なんですよ。そんな二人が仲いいなんて情報が出回ってないって本当に思います？」

う、つと言葉に詰まる。それは要するにイギリスの皇太子の結婚事情みたいなものを日本人が知ってるような感じだということだろうか。世界中に彦星と織り姫のように熱愛だと思われると思うとかなり恥ずかしい。そろそろ三十の大台に乗りそうだというのにそんな羞恥プレイはごめんだ。

固まる彼をよそに楽しそうに笑うと、それっきりで東の同僚の人は帰ってしまった。

「おわったー！ さ、かえろ？ ってどうしたの頭抱えて。やっぱり調子悪いの？」

歡喜の声を上げながら出てきた東が心配そうに彼を見た。

「いや、そうじゃなくて予想以上の自分の有名度に泣きたくなくなってきただけだから」

「そう、じゃ帰ろ？ あの子も待つてるだろうし」

東はそういった後に周りを見ると、彼に手を差し出した。

「んっ」

彼は一瞬惚けたあとに、力強くその手を握る。よく手入れをされた手はすべて気持ちがいい。二人で目を合わせてそつと微笑んだ。

「いこう」

「そうだね」

二人、固くつながった手をそのままに歩き出す。

「今日のご飯は何にする？」

「とりあえずタマネギと人参はあっただろ。それになすもあつたはず。肉は……」

「なかったと思うけど……あ、でもひき肉はあつたかも」

「そつか。なら今日は中華風野菜炒めとしますか」

「ええ、たまにはフランス料理とかにしようよ」

「俺が知らん」

「じゃあ私が作る」

「はあ……あのな、休みのとりやすい俺と違って束は家にいる時間が少ないんだから、あの子ともっと一緒にいてやりなよ」

「う……それをいわれると何も返せないよ。……そうだね、今日は束さんは全力であの子のことかまっちゃうぞおお」

手を空につきだして宣言した。もちろん手はつないだままだからか、彼が大きく体勢を崩す。

「きゃっ！」

「うわっ」

そのまま彼が束に押しかかる形になったが、彼がどうにか踏ん張って倒れなかった。しかしその代わりに束が彼の腕に収まってしまった。そして、そのままなぜか彼は束を離さない。

「……………えっと、欲求不満？」

「んなわけあるか。ただちよつとね。ほら、家に帰ればあの子がいるわけだし。ここで束成分を接種しておこうとおもってさ」

そついうことなら喜んで。束は彼の体に腕をまわしてぎゅーと抱きしめる。抱きしめた腕のなかで彼の体温がどんどん束へと伝わる。

「……………ん」

束は彼の胸に顔を埋め、やがて満足できないとでもいうように顔を上へと向け目をつむった。

「しかたないな」

そついった彼もまんざらじゃない顔をして、そのまま近づけていて

夜は更けていく。いつだって熱愛な二人はこれからいちゃいちゃしながら家に帰るのだ。

そしてそんな二人をお月様だけが見ていた　　はずもなく、周りを気にせずいちゃいちゃするから二人がラブラブだと学園の誰もが知ってるのだ。時に苦笑い、時に赤くなり、時に血の涙を流しながら、道行く人は二人を見る。

こうしてIS学園の一日は過ぎていく。

《完》

生存IF 二話（後書き）

一応これにて完結。

これからは番外編を更新するかもしれないくらいです。

血冬（誤字にあらず）のドイツ壊滅作戦や、【一生】一夏がIS学園に入学したら【卒業できない】などなど。いろいろネタはありますんで。感想の方でネタをくれたら早めにかけるでしょう。

いつか、どこかの小説で、また会いましょう。では。

生存IF 第三話 短編集

専用機（笑）

世界で初めてISに乗れる男が現れた日の夜。

「……俺も、のりたかったなあ……」

「……ごめんね。私が……なんにもできないから……」

「いや、束が落ち込む必要はない……かな。あれは仕方なかったって。それに……きつとこうして一夏が乗れるようになったっていうのは、なんかあるんだよ理由が」

「うん。私も、そう思うよ。もうお兄さんは宇宙に夢を追いにいく年じゃなくなっただけ、きつと私がいつか……ちゃんと約束をまもるから」

「束……俺はいい嫁さんをもったよ」

「いまさら？」

「うん。なんか落ち込んでたのがバカらしくなってきたかも」

「そうそう、お兄さんは落ち込む必要なんて無いんだよ！それに、お兄さんは立派な専用機をもってるよ」

「専用機……？ いや、そんなの」

「あるよ。だって私に乗れるのはお兄さんくらいなんだから」

「……あゝつまりそれって」

「もつといっちゃうと私の上についてことかな。たまに逆になるけど。……あはは、自分でいったけど恥ずかしいね」

「……ごめん。ちょっと今乗るわ」

「え……きゃっ！ ちょっとソファアの上でなんて」

「いや？」

「……むゝ、二人目がOKならいいよ……」

「なら、どんとこいだ！」

「もう！……若いんだか あっ、そこっ……」

俺の名は。

「よう、一夏！ 久しぶりだな」

「あ、内田さん！ こんにちは。一年ぶりくらいですよ。前はお世話になりました」

「俺たちも千冬さんにはお世話になってるしね。別に大丈夫だよ。あ、後その内田さんって言うのはここではあんまり伝わらないと思う」

「え？ なんで……ってそうですよね。そういえば内田さんって篠ノ之さんに変わってたんですね」

「そうそう。ここIS学園じゃそっちのほうの通りがいいからね。……どうだ？ ここすごいだろ」

「ほんと、こっちに来てから驚いてばかりです。特に学食。自動で作ってくれる機械まであるなんて……ちょっと近未来すぎてびっくりしました」

「あれかあ。あれはさ、束が一昨年に一つだけ学園のアンケートで頼まれたものを作るって企画があってね、そのときの一位だったん

だよ。やっぱりみんな研究に熱中すると飯を食べるのを忘れるらしくって。でもみんなできない研究を束にやってほしいとかいわないんだから面白いよな」

「なるほど。ここらしいです」

「そういえば……前の学校のやつらになんか言われなかったか？」

「いわれました。努力してないのに高学歴入手とかずるって」

「やっぱりか。……まあ、簡単にあげないけどな」

「あれ、なにかいいました？」

「いやあ？ 何もいつてないけど（笑）」

「そうですか？ あ、そうだ。内田さ じゃなくて篠ノ之さんって東さんの連絡先って知りませんか？ 実は今日東さんのところで検査を受けるんですけど、ちょっと聞きたいことがあって」

「ん？ それなら俺の名刺に書いてあるから一緒に渡しておくよ。ほい」

「本当ですか！ ありがとうございます え？」

「……頼む。なにもいわないでくれ」

「いや、でも。名前が本名 篠ノ之お兄さんって……いや、え？」

「一夏……これにはな、非常に複雑でかつ高度な政治的問題があるんだ！ わかったらとっと行けッ！」

中国からの留学生から見た二人。

「い〜〜〜ち〜〜〜か〜〜〜〜〜！！！」

「おわっ！ いきなりとびかかってくるから誰かと思ったら鈴か！ ひさしぶりだなあ」

「（抱きついてるつもりなんだけど……）そうよね。私が中学から転校して以来ね。……聞いたわよ？ 初めてのIS男性操縦士なんですって？ もしよかったわ、私が教えよつか？」

「え、鈴もIS乗れるのか！？」

「そりゃそうだろ。こう見えて鈴は専用機持ちだからな」

「あ、お兄さん！ こんにちは。今日は東先生が背中に引っ付いてないんですね」

「……あのな。いつも束が引っ付いてる訳じゃない、というかくつついてたのはあの日だけだ!」

「え、でも二人はよく学校でくつついてるって話聞きますけど」

「……」

「（内田さん……本当にお兄さんって呼ばれてるんだなあ）……鈴、その、いつも引っ付いてるってところ k w s k」

一夏、特訓という名のスキップと伝説の数々を知る。

「いいか一夏。……あまり言いたくはないが、お前はそれほど頭が良くない」

「千冬姉。いきなり現れてびっくりしたんだけど。背後からぬって現れないでくれ。それと俺はいつの間にアーリーナに来たんだ?」

「そこは当て身をいれて……つと別に今言つべきことではないな。ともかくだ、一夏は頭が良くない」

「……二度言う必要、ないんじゃないかな」

「ばかもの。今の自分の立ち位置の確認というのは常に自分の精進のためには必要不可欠なのだぞ。……いいか、このIS学園を卒業すれば高学歴と言われているか知っているか？」

「そりや入学するのが難しいからだろ？」

「それもある。お前は知らないだろうが日本は入るのが難しく、卒業するのが簡単な大学が多い。逆に外国では卒業するのが難しいわけだ。でだ、ここIS学園はというと……どっちも恐ろしく難しい。それこそ卒論に海外のメーカーのスカウトがわんさかくるレベルだ。現場でも即座に戦力になると非常に重宝されている訳だ。就職氷河期のこのご時世でよりどりみどりののはここくらいらしいぞ」

「はあ……それがどうしたんだよ。俺だって知ってるぞそのくらい」

「いや、一夏！ お前は全くわかってない。いいか？ 卒業するのが恐ろしく難しいんだぞ？ お前に企業に通用するようなレベルの卒論が書けるのか？」

「……いや、が、がんばれば」

「はつきり言っておこう。無理だ。そもそも進級できるか怪しい」

「……そ、そんな。千冬姉、俺どうすれば……！」

「まあ待て。そのために私がいるんだ。いいか一夏。おそらくお前は私に似て運動神経はいいだろう。だからISの操縦実習でどうにか単位を取り続けるんだ！ お前に中卒を逃れるすべはそれしかない！」

「ち、千冬姉！ 俺、やるよ！ だから俺を鍛えてくれ！」

「ああ、まかせろ。私は世界最強だぞ？ ビシバシいくからな？」

「おう！」

と一夏がISを着込んでアリーナにたつと、ISのハイパーセンサーが周囲の音を拾ってきた。こんなに遠くの声も聞こえるってすごいなあと感心していた一夏の耳に入ったのは

「あ！ 見て！ あの血冬がISを着てるわよ！」
フラッディ・ウィンター

「そ、そんな！？ ここに誰か犯罪者でもいるのか！？ み、みんな避難するんだ！ 細切れにされるぞ！」

「え？ どうしたのよ……って、ヤバイ！ 傾国の暮桜を着込んでる！ 至急アリーナにレベルマックスのシールドを張りなさい！」

「う、うそよ……祖国ドイツに血の雨を降らせたあのISが起動してるなんて……」

「たたたいへんよ！ ドイツ国籍の子がトラウマを再発させてるわ！ いそいで救護室へ！」

「いいからまずは避難するんだ！」

……なにやら恐ろしい声が飛び交っていた。

思わず冷や汗が吹き出した。

「ち、ちふゆねえ？ あのさ、周りがすごいいろいろ言ってるんだけど……その、俺はこれから何をされるの？」

「ん？ それはあれだ。この前見た文献に書いてあったんだが、一度死にかけるような体験をすると人は強くなれるらしいから……ちよつと深く潜らせようかと思ってる」

「潜らせる！？ どこに！？」

「どこにつて……下にだが？」

「それ物理的な意味で！？ それとも天国地獄の意味で！？ どっちにしてもこえーよ！」

「大丈夫だ、問題ない。そのへんの手加減には世界一うまい自信があるからな。それ 逝ってこい」

「ちょ、手加減ができるってことは何度もやってるってことー！
？　って、ぎゃー！ー！！」

東校長先生と妹の関係

「いちち。　一昨日千冬姉に叩かれた場所がまだいてー」

「それくらいですんだことを天に感謝した方がいいと思うぞ」

「箒、さすがにそれは言い過ぎ……でもないかもしれない。昨日は
散々だったし」

「昨日？　そういえば一夏の姿を見ないと思ったが………　なにか
あったのか？」

「ああ、昨日は動けなかったからな。　千冬姉が看病してくれたんだ」

「……（なるほど。つきつきりでスキンシップをとるためにわざと痛めつけたのか。さすが千冬さん。折り紙付きのブラコンだ）」

「おかゆとか作ってくれたし。結構おいしかったよ。それに途中からは鈴とかセシリアとかが見舞いにきてくれたし」

「む……私は行かなかったわけじゃないぞ。その……知らなかったんだ！」

「お、おい落ち着けてそんなに身を乗り出したら倒れるぞ、って
うわっ！」

「きゃあ！？ ……痛っ、おい一夏。その、大丈夫か……って貴様はどこを触ってるんだ！」

「いちち……ん？ って、うわあー！？」

「早くその手をどけろ！ ……そ、それとも何だ。さささ触りたかったのか？」

「いや、全く。……ってどうしたんだよ。おい、なんで手に木刀持ってたんだ　　うお！？　　まで、待つんだ筈！」

「待たん！　貴様の性根を叩き直してやる！」

「あぶねえ！　　うつそ。鉄の扉が壊れてるし。いや、待てあれを生身で受けたら……」

「天誅——！！！」

「ぎゃー！ー！」

思わず部屋から逃げ出した一夏。飛び出すように切り裂かれたドアを開ける。しかし部屋をでた瞬間になにやら柔らかいものに顔が埋まった。

「あれ、いつくんどうしたの？」

「た、束さん！？ 助けてください！」

「た、助けて？ いきなりどうしたの？」

「う、後ろに般若が……！」

プルプルと震える腕で背後を指差し、束はそれを見るとあちゃーと眉をひそめた。

「姉さん！ 一夏をそのまま捕まえててください！ 私が今から叩ききってやりますから！」

「もう……簾ちゃん？」

怒り心頭。真っ赤な顔の簾に束がたしなめるように声をかける。それにいくらか落ち着きを取り戻したのか、荒い息を抑えるようにはいた。それでも一回は叩いてやろうと思ってるのか目が怖い。

「うんうん。落ち着いたみたいだね。じゃ、これ。はい」

束はそんな簾につこりとした笑顔をしながら一枚の髪をわたした。

そこに書いてあったものは

「なんですかこれ？ 請求書？ ドア代12万円！？ なんですかこれ！？」

「今篝ちゃんが串刺しにした扉はいろいろ防犯対策が使われてる扉だからちよつと高いんだ」

「内訳を聞いてるんじゃないんです！ なんで私が」

「だって壊したでしょ？ あのね篝ちゃん。普通ものを壊したら弁償するんだよ？」

「そ、そんな。こんなお金ないですし……その、えつと……」

「じゃあお母さんたちに手紙書くしか無いかな？」

「姉さん！ その……ひ、秘密には、できないですか？」

「……うーん、私は篝ちゃんのお姉ちゃんだけど、ここの校長先生なんだからちよと見逃せないかな」

「そ、そんなあ」

「それと反省文をちゃんと書くこと。いい？」

「……はい」

「それにしても、ちーちゃんの部屋の扉壊されちゃったし、扉が直

るまではちーちゃん家に泊まってもらおうか」

「……………」

「いっくんは、そうだね。誰か部屋の余ってる人にたのもうかな？
そうだ、篝ちゃんの部屋って余ってない？」

「……！ 大丈夫です！ 余ってます！」

「そっか。じゃあいっくんは篝ちゃんの家しばらくは泊まってね
？」

「姉さん……ありがとうございます！」

「……ふふ、種付けはまだされちゃだめだよ？」

「……！？ し、しません！」

思い出

「私はね、幸せだよ。世界中の誰よりも」

もう誰もが寝静まった夜の中で、束がいった。縁側で月を眺める彼女は、なるほど。確かに女神と言われるだけのことはある。わずかに三枚とはいえ、束と彼のデートの写真に映った笑顔の束が載せられた週刊誌は今やプレミアがついてとんでもない値段がついているのが納得できるだけの理由がそこにはあった。

「今も幸せだし、これからも幸せでいると思う。あなたがいたから……私は幸せなんだ」

「……それなりに大変だったけどな」

束はおかしそうに口に手を当てた。

「でも今思うと楽しかったよ」

「そうか？ 俺は血のドイツ事件とかが頭に浮かんで鬱になるんだが」

「そ、それは。でもほら旅行とかは楽しかったよね」

「話を変えたな。まあ、どちらにしても俺には辛かった。あのころは二人旅行に行くと必ず黒服のエージェントが現れるのがデフォだったし」

「あはは………」

「あいつらどこにでもいるし。洗濯をしようとしてコインランドリ

「の洗濯機をあけた中にいたときは心臓止まるかと思った」

「あれは、さすがの束さんにも予想外だったよ」

「あと適当によった縁日にいた人間がすべてエージェントだったときは死ぬかと思った」

「全部の食べ物に残らず睡眠薬がまじってたんだよねえ」

「極めつけにはお前をターミネイトするとかわけのわからんことをいったかっこいいおっさんが出てくるし、どこからともなくダダッ、ダッ、ダダン！ って音が聞こえてくるし」

「いつか近い未来でISと人間の戦争が始まるのだ！ とかいつてたね」

「……やっぱりいい思い出がない」

「……………」

「でも、確かに思い返すと楽しかったかもしれない」

「あなた……………」

「いろいろ見れたし。いろいろ経験できた。まあ、普通の生活する分には絶対使わない経験だったけど」

「そう、だね。きっと私がエネルギー問題を解決したせいで石油が売れなくなつて逆恨みした石油王に狙われた一般人つてあなたくらいだと思つよ」

「そうだよなあ。……………ちょっとまで、俺はそんな話聞いてないぞ」

「うん。だってちーちゃんが壊滅させたし」

「……………もうなにもいわんぞ。なにもいわんからな」

「それより……………ね、私昨日お医者さんにいつてきたんだ……………」

「医者？ どこか調子が悪いのか？」

「ううん。ちょっといいことがあって……………」

「いいこと……………あ」

「ね、名前……………どんなのにするか。考えておいてね、あなた？」

生存IF 中学生編 第一話

彼が事故にあってから二年の月日がたった。

ISく束が異常になつたわけく 生存IF

中学二年の夏に陰謀と純愛が吹き荒れる

第一話 「……バカ」

その夏はやたら早い雨期の終わりと共に始まった。ミンミンと頼んでもいないのに耳障りな音を立てる蝉に辟易とし、照りつける太陽にたまには休めと悪態をつきたくなるような夏。うだるような暑さの中、コンクリートがここぞとばかりに熱を放って遠くに蜃気楼が見えた。

「……あつい」

そんな都会特有のコンクリート地獄に非常に不機嫌な顔をしてつぶやく少女が一人。

「そうだね」

汗を拭う少女　織斑千冬の隣を歩く束は、まったくだと言わんばかりに同意した。

「そのわりには暑そうには見えないな」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました！　実は今日は新しい発明を作ってみたんだよーちゃん！　その名も『服の裏につければあら不思議。とっても涼しく感じちゃうの』だよ！　この一見ほっかいろにも見えるこの機械を服の内側に貼付けるとあら不思議。全然暑さが気にならないくらいに涼しくなるんだよ！」

じゃじゃーんと口で効果音をつけながら突き出したほつかいりに似た何か。なんでそんなものが作れるのかなんて質問はしない。ただ千冬は不満そうに口を尖らせた。

「ほお？　つまりお前は私が暑いのを我慢していたのを笑いながら見ていたということだな？」

「ザッツ、ライター」

瞬間、千冬の腕がかすんで束の顔面をつかんだ。いわゆるアイア
ンクロー。みしみしと回りに聞こえるくらいの音が響き、束の体が
宙に浮く。お前は本当に中学二年生か？　というツツコミは彼女に
は通用しない。

「あたたた！　中身がでちゃうううう！？」

対する束もちろんそこにカテゴライズしてはいけない。割と本
気で千冬が束の頭をかち割ってやろうとしていることに気がつく
と、ポケットからぽろつと小さな玉がこぼれ落ちた。千冬が鷹の眼のよ
うな鋭さでそれをにらんだ瞬間、半径二メートルの範囲の眼をつぶ
す強烈な閃光が生まれる。さすがの千冬もまずいと手を離して眼を
守った。

「ふいー。最近ちーちゃんの攻めが容赦ないような気がするよ」

「どうしてそうなったのか、今の行動を振り返りながら考えてみる」

「ん？　別にちーちゃん以外にはやらないから大丈夫！」

そういうことじゃないんだ。千冬は思わずこめかみに指を当てた。
昔はまともだったのに、最近束がちょっと自重しなくなってきた、
と悲しそうにこぼした。……自分のことは棚にあげていたが。

「そういえば、昨日電話が繋がらなかったが……またお兄さんの家にいったのか？」

「そうだよ。昨日はね、とうとうお義母さんにお味噌汁で勝ったんだ！ 私のほうがおいしいんだって！」

束が満面の笑みで笑った。千冬はあきれたように息を吐く。

「最近は毎日じゃないか。少しくらいは私とも夜に電話してくれ」

「え、ごめんね？ でもお兄さんも勉強もそろそろ終わるからちよつと力が入っちゃって」

「いいさ、今日は電話できるんだろ？」

「うん。さっきの今で悪いと思うんだけど……今日も行くってお義母さんにいつてるから」

「……………」

じーっと見つめる千冬。束も悪いと思っていいのか、あんまり強くは出れない。いけないとは思いつつ、背中のを外して恐る恐る千冬に差し出した。

「その……『服の裏につければあら不思議。とっても涼しく感じちゃうの』あげるから。……ゆるして？」

「っ……………」

ものでつつているのはわかってる。本当はいけないと思ってる。が、千冬の眼が揺れた。さすがにこの暑さを前に束のそれは欲しかったらしい。この千冬はわりと欲望に忠実だった。

……暑いのがなくなる？ きつと束の発明だから快適だろうなあ。バスを待つてるときも涼しいだろうなあ。いいなあ。でも物につられる関係の親友っておかしくないか？ でもいいなあ……一回くら

いならもらつても……でも一回でも始めると止まらないっていうし……

と葛藤をする千冬。

「いや……………いらん」

三十秒、返答にかかった。束は内心で千冬の葛藤が手に取るようにわかるのか、腹筋をひくひくさせながらがんばって耐えた。できることなら声を上げて笑いたかった。ごろごろ転げ回るのもいい。とわいえ、彼女の前でそんなことをするわけにもいかない。彼女はからかわれるのが嫌いだから。……その理由の大部分は最近束にかかわれすぎたのが大部分を占めているのは言わずもがな。ちなみに、束も物で成り立つ関係はご遠慮願いたい。もちろんのことながら千冬がそう答えるとなわかっていての行動だったが、それでも思った通りに百面相してくれた千冬はからかうとても面白い。うんうん、と改めて親友のおもしろさを噛み締める。

「まあまあ、ちーちゃん。もともと一つ上げるつもりだったからね。受け取って。それと電話は無理だけど、夜にメールするから！」
「ふん。そういつて忘れるんだろ？ お兄さんが絡むと世界最高の頭脳もかたなしだからな」

まいったといわんばかりに肩をすくめる千冬。今までの経験上、束はお兄さんが絡むととたんに今までの知性をどこかに投げ捨てる傾向がつよい。何度お兄さんからみでドタキャンされたこそか。束もそれを自覚していて、それでも直せないのが一番タチがわるい。

「あはは。否定はしないよ。じゃあそろそろ、いくね」

「ああ、夜のメール楽しみにしてる。できるなら料理の写真とレシ

ピも一緒に送ってくれ。最近一夏が料理にはまっとな」
「そっか。うん！ちゃんと送っておくよ。じゃあね！」

かつてのように鼻歌まじりに気分良さげに束は帰り道を歩いていった。今だけは日は長く、夕暮れと水色の空の境界線を眺めながら、両手に買い物袋を抱えている。

二年前にはふらふらと危なっかしかったであろう重さの買い物袋も中学二年生となればそこまで重く感じなかった。

そう、もう彼女は中学二年生なのだ。

二年前よりも25センチも身長は伸び、大人と何ら変わるところのない高さへ。体は二次成長の途中ゆえにか丸みが残っているが、将来を期待できるラインが制服越しからでもよくわかる。

特に胸部のそれは同学年と比べるとかなり大きいと言わざるおえない。

ありたいにいつてしまえば、誰もが羨むプロポーションの蛹だった。

もちろん勘違いして欲しくないが、彼女も何の努力もせずになったわけではない。彼女は自身の輝かしい頭脳をフルに使って多数の器具を開発。豊胸から始まり、体型維持や肌のツヤ、ニキビやシワのできにくい肌の形成、幼少からの顔の骨格の調整などなど。思いつくすべてのことをやった。その器具の開発のためにかかった金額は9ケタにのぼる。もしかしたら世界一お金のかかっている美貌なのかもしれない。

さて、そこまで彼女が体にかける熱意はいつたいなんなのだろうか。

いや、この考えは今更だったか。

そう、すべては東が彼にきれいだと思われない一心から始まったのだ。

ある意味でとても健気な少女にしか見えない東だが、そんな彼女が向かっているのは彼の家。自宅には一応携帯でたべてくると連絡をいれてある。

そのあたりの流れは篠ノ之家も手馴れたものだ。ちなみに母と子のメールはこんな感じ。

From 東

泊まって来る。

From 母

泊りはダメ。

ちゃんと挨拶するのよ

From 東

わかった。

From 母

いつもいつてるけど、男のハートをつかむのはいつだって母性とギヤップよ。

といった流れであつた。なかなかに良好な家族関係である。

少し前までは東はどこか一線を家族に引いていたが、それはもうない。彼と一緒にいるうちに、なんでか家族と話し合ってみた気持ちになつたからだ。

東は一日かけて家族と話した。自分はおかしい。でもみんなと仲良くしたい。

その顛末はかたる必要はないだろう。一言いうのならば、今の東に家族関係で不満なことなんて、最近お父さんの絡みがうざったく感じてきたくらいだろう。ちゃんとノックするのはいいが、ノックしながら入ってきたらノックの意味はないだろう。

…わたしだつて年頃の女の子なんだから。

と、そんなことをつらつらと考えていると目的地が目の前に見え

てきた。なにも考えずともここにこれるほどに通い慣れてしまったことに少しだけ苦笑。まわりを見回せば同じような家がいくつも立ち並んでいるような普通の家。束の家のように和風というわけでもなく、純粹に最近の日本の家という感じだ。

両手に持った買い物袋を片手にもち、ポケットから鍵をだし、開ける。

「おじゃましてーす！」

まだ誰も家に帰っていないようだ。ぱつと靴をみて判断すると、束は食材をしまったために台所へ。すぐに食べ物を使うものとしきうものに分けて仕舞っていく。

それが終わると、台所の水場をみる。どうやら昨日のお皿をまだ片付けていないようだ。とりあえずそれは後に片付けることにして、炊飯器の中身を確認する。だめだ、二合くらいのご飯しかない。

……これは夜食のおにぎりにするとして、炊いちゃいますか。

彼も成長期が終わったとはいえ、高校三年生。まだまだ食べ盛りで、束の三倍は食べる。いつも自分のご飯をガツガツとみていて気持ちのいいくらい食べる姿を思い出すと嬉しくなる。

それを終えて炊き終わりとおかずを作る時間を考える。どうやら余裕がありそうなので、先にお皿を片付けることにする。

どうにも彼の母は最近の束に遠慮がなくなってきたらしい。完全に家族の一人として仕事を割り振って来ることが時折あった。

それはそれでうれしいし、花嫁修行としてはucciいな束であった。

……お、お嫁さんって、そんな、わたし大胆……っ！

ひとり恥ずかしさにくねくねと体は動かす。頬は真っ赤だった。

「と、いけないいけない。ちゃかちゃか作らないとね」

彼は確か昨日の夜にいつもの時間に帰ってくるといつていた。そろそろ作らないと間に合わないだろう。

束は机の上にだしておいた食材をまな板の方へ寄せて軽く水洗いし、どんどん切っていく。

迷い？ なにそれ。といわんばかりに効率的な動きをしていく束。最初のころに温度の加減と熱の通り具合がわからずに野菜を部分的に焦がしていた姿はもうない。

途中、彼の母からメールで仕事で帰るのが遅れると連絡がきた。めずらしいが、今まででもなかったわけじゃない。最初は二人きりに緊張していたが慣れた。が慣れても好きな人と二人きりだと思つとテンションもあがる。

鼻歌を歌いつつ、フライパンの上の野菜がリズムにあわせて跳ねる。

ちゃかちゃかと作り完成を目の前にして時計を見ればいつもの時間から十分ほど遅れた時間だった。彼が自分でいった時間までに帰らないなんて珍しいなと思いつつ、さっとお皿に盛り付ける。

……そうだ、まだ帰らないならお兄さんの好きなおかずでも作ろっかな？

と思い立って、昨日のうちに作って置いた焼きなすの漬物を取り出して味を整える。

さあ、後はしょうがをナスに載せるだけ。となったときに玄関のほうからがちゃつと音がした。彼の父はこんな早い時間に帰って来ることは滅多にないので、十中八九彼だろう。

「ただいまー」

やはり。聞き慣れた彼の声が家に響く。束は慌ててご飯をよそってテーブルにおくと、エプロンにかけたタオルで軽く手を吹きつつ、彼を玄関まで迎えにいった。束は彼を迎えるこの瞬間がわりと好きだ。理由は言わずもがな。

「おかえりー……？」

が、今日は束が幸せな気分にはなかった。

なぜなら……

「あ、あの！ 内田君のクラスメイトの田中真弓です！ お、お邪魔します！」

とわざわざ自己紹介をしてくれる女の子を彼を連れて帰ってきたからだ。

「え……？」

「なんだ束ちゃんか。緊張しちゃったよ。真弓、この子は近所に住んでる束ちゃん。それで束ちゃん？ このお姉さんは俺の彼女の真弓っていうんだ。仲良くしてくれる？」

彼女……？

呆然とした頭にそれだけが何度も繰り返し、手に持っていたタオルが妙に大きな音でトサッと音をたてて落ちた。

生存IF 中学生編 第一話（後書き）

予告……………

突然彼女だと紹介された束は混乱し、嫉妬の炎が燃え上がる。
……わたしがいるのに……っ！

次回、本気になった束の暗躍系蹂躞劇。

「お兄さんに指一本でも触れたら、殺すから」

自分がお兄さんだと思って次のコマンドから選んでください。どうにかして束のヤンデレ化を回避しましょう。

コマンド

あなたはどれを選んでいい。

- 1、束の頭を撫でておく。
- 2、食事のあとに彼女を送っていく。
- 3、束のご飯を褒める。

4、束にいつもありがとうとお礼をいう。

5、みんなの親睦のために仲良くトランプ。

さあ、どれを選びますか？

選択次第では地獄をみます。……彼女が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8622v/>

IS～東が異常になったわけ～

2011年11月3日02時03分発行